

平成30年度

青少年赤十字国際交流事業
フィリピン派遣

—実施報告書—



平成30年8月12日(日)～18日(土)



日本赤十字社福島県支部
青少年赤十字福島県指導者協議会



目 次

1. あいさつ（日本赤十字社福島県支部事務局長）	2
2. 「フィリピン派遣」に参加して（派遣団長）	3
3. 派遣団員名簿	4
4. 交流日程	5
5. 訪問箇所（図表）	6
6. 訪問日誌	7
7. フィリピンを訪問して（派遣団員所感）	20
8. 自由研究（高校生団員）	39
9. アンケート集計結果	51
10. 事前・事後研修の開催	53
11. 報告会の開催	54
12. 実施要項	55
13. 持参の交流物品 編集後記	

* 1 フィリピンの学校について

フィリピンの小学校は1～6年、高校が1～4学年となっている。フィリピンの高校は日本の1～3学年と高校の1学年にあたる。

* 2 ソルト・パヤタスは、正式には「特定非営利活動法人ソルト・パヤタス」であるが、文中では、ソルト・パヤタスと標記している。

あ い さ つ

日本赤十字社福島県支部

事務局長 篠 木 敏 明

日本赤十字社福島県支部では、平成18年度から県内の高校生を対象に、青少年赤十字国際交流事業として「フィリピン派遣」を実施しています。

これは、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を実践するため、広く世界の国々に目を向け、海外の青少年赤十字メンバーとの交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に行っているものです。

東日本大震災等により休止した年もありましたが、平成25年度からは復興支援事業の一つとして実施し、平成28年度で8回を数えました。

平成29年度は、相互交流の観点から、さらにより多くの本県高校生との交流を図ることを目的に、初めてフィリピンからメンバー4名とスタッフ1名を本県へ招聘いたしました。

いわき地区の津波被害の状況や原子力災害についての学習など福島の現状について理解を深めていただくとともに、学校訪問や県大会などを通して、本県高校生と充実した交流を図ることができました。

大震災から7年8か月が経過しました（平成30年11月現在）。本県においては、避難指示の解除も進み、復興へ向けた取組が着実に進展しております。その一方で、4万4千人の県民が県内外に避難生活を続けております。

このような中、平成30年度は、本県から再びフィリピンへ派遣することとしました。

「百聞は一見に如かず」といいますが、特に若いときの実際に自分の目で見たこと、自分の耳で聴いたこと、感じたことは、その人のその後の人生に大きな影響を与えるものと思います。

この報告書に収められた高校生の報告を読みますと、訪問先の高校で予想を超える熱烈な歓迎を受けたことや、激しい貧富の差、貧しい生活の状態などを目の当たりにして、そこから彼らが自ら気づき、考え、実行していく姿勢が強く感じられました。

今回のフィリピン派遣を通して、高校生がより広い視野でやさしさと思いやりの心を持ちながら、様々な困難に立ち向い、主体的に行動できる人間へ成長し、本県復興の担い手となるものと確信しております。

結びに、今回の青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」の実施に当たり、ご支援、ご協力をいただきました関係者、関係機関の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成30年度 青少年赤十字国際交流事業 「フィリピン派遣」に参加して

団長 金澤直人

日本赤十字社福島県支部主催の復興事業の一環であるフィリピン派遣事業に、県内青少年赤十字メンバーの代表6名と引率顧問2名、日赤福島県支部職員2名の合計10名が参加しました。フィリピン赤十字本社や各支部を訪問し、東日本大震災後の支援に対する感謝を表し、お互いの協力を確認し合うとともに、小学校、高等学校および短期大学では日本紹介を含めて交流活動を行ってまいりました。

事前研修での初顔合わせから実際の派遣まで約2ヶ月間、派遣における意義や目的について学ぶとともに、交流内容についての検討と準備を重ねました。しかし、今年度の派遣メンバーのうち半数が3年生であることもあり、思うように集まることができませんでした。おそらく、派遣メンバー全員が不安のなかでの出発となってしまったことでしょう。

派遣は、13日のフィリピン赤十字本社訪問からはじまりました。フィリピン本社ではちょうど11日の大雨による洪水被害への対応の最中でした。しかし、私たちを温かく迎え入れていただきました。なお、この水害の影響で、13日のケソン支部訪問および学校訪問は中止となってしまいましたが、その後のバタアン支部、ラス・ピニヤス副支部の訪問は予定通り実施できました。

交流活動では、それぞれの学校での熱烈な歓迎ぶりに、私たちも面食らうほどでした。そのような中で、事前研修で準備していた交流会の出し物についても、回数を重ねるごとに創意工夫と洗練さを増し、最終的には私たちが満足のできるものとなりました。

さらに、サマット山やゼロポイントの見学では、バタアン支部のユースメンバーが1日同行して下さいました。移動中のバス車内がさながら交流会場となり、派遣メンバーたちは身振り手振りを交えながら生の交流を図ることができました。加えて、サマット山戦争資料館では、ユースメンバーから説明を受けることができました。立場は違えども、同じ第二次世界大戦のできごとです。それは、逆の立場に立ったときに、私たちは伝えることができるだろうか、と反省をした瞬間でもありました。知らなければ「伝える」ことはできません。「伝える」ために、「知る」こと。メンバー一人ひとりが、心に刻んだことだと思います。

派遣メンバーは当初、日本との文化の違いに戸惑いを隠せない様子でした。しかし、フィリピンの方々の笑顔に触れることで、しだいに自身のできる範囲で主体的にアプローチできるようになっていきました。それは、メンバー自身が「気づき」「考え」「実行する」ことができた成果だと思います。さらに、本研修をきっかけとして、自分自身がやりたいことに気づき、実現するために急遽進路を変更した、という話も聞きました。正直、とても頼もしく思うとともに、これほどまでに大きな影響を与える学びの機会なのかと驚きを隠せませんでした。

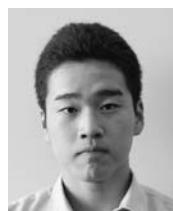
最後に、このような貴重な機会を与えていただいた日本赤十字社福島県支部の皆さん、関係者の皆さんに心から感謝し、今後のJRC活動に生かしてまいりたいと思います。

3. 「フィリピン派遣」参加者



佐 藤 涼 香

学校法人福島成蹊学園
福島成蹊高等学校
3年



原 大 河

学校法人松韻学園
福島高等学校
2年



齋 藤 優 真

福島県立
郡山北工業高等学校
3年



内 儀 雪 野

福島県立
白河旭高等学校
3年



星 南 充

福島県立
会津学鳳高等学校
3年



小 泉 胡 春

福島県立
いわき総合高等学校
1年



金 澤 直 人

福島県立
白河実業高等学校
青少年赤十字顧問



八 島 梓

福島県立
平支援学校
青少年赤十字顧問



松 本 琢 也

日本赤十字社福島県支部
総務係長



岩 崎 瞳 子

日本赤十字社福島県支部
参事

4. 交 流 日 程

日付 曜日	第1日 8月12日 日	第2日 8月13日 月	第3日 8月14日 火	第4日 8月15日 水	第5日 8月16日 木	第6日 8月17日 金	第7日 8月18日 土
4							
5							
6		朝食	朝食				
7				朝食 バタアン州へ移動 ・サンギレルモ教会見学	朝食 移動	朝食	
8		移動	移動		・バタアン支部 ・バタアン朝市見学 ・サマット山戦争資料館見学 ・ゼロポイント、モニメント見学 ・フレンドシップセンター見学	移動	
9	9:30 福島県支部 発貸切バス	フィリピン赤十字 本社訪問	時間の都合で支部 訪問はキャンセル			ラス・ビニヤス副支部訪問 リサイクル施設ほか	
10	10:40 郡山駅前発		①交流プログラム セントルチア高 校訪問 交流会（ケソン市）			見学	JAL746便 19:30発
11							
12	湯本IC柏屋駐車場発 (12:05)	昼食（本社）	移動 ケソン支部のユー スマンバと昼食会	・支部職員、ユースメ ンバーとの昼食会	移動 昼食（ランチ弁当）	移動 昼食	
13		本社見学 台風の影響で午後 のプログラムは変更		②交流プログラム バタアン公立 高校訪問	バタアン原発見学		
14			パヤタス地区訪問 ソルトのスタディツア ー家庭訪問			モール・オブ・アジア 見学、買い物	
15	15:00 成田空港 第2ターミナル到着			③交流プログラム ペニンスラ大学	バランガへ移動		
16	チェックイン				マニラへ移動		
17		移動		移動			
18	JAL745便 17:55発	夕食 (市内レストラン)	移動 夕食(ソルトのメンバーと夕食会)	地元赤十字関係者 と交流会（夕食）	(途中 夕食)	移動	
19						お別れ夕食会 市内レストラン	
20		ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	ホテル到着 打合せ	ホテル 打合せ	
21	21:35 マニラ国際 空港到着						1:00 ホテル着
22							
23							
宿泊	ホテル (デュシタニ マニラ) 到着 打合せ	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	バランガ市内ホテル (Crown Royal Hotel)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	マニラ市内ホテル (デュシタニ マニラ)	成田ホテル泊

訪問先、活動内容 マニラ首都圏、バタアン州
 フィリピン赤十字本社 フィリピン赤十字支部
 小学校、高校（交流会、授業参観、先生の説明）
 フィリピン赤十字事業実施個所見学
 青年ボランティアとの交流
 史跡見学 NGO活動視察・意見交換

* 8月18日（土）前日の飛行場のトラブルで日本着が深夜になり、成田泊となつた。

5. 2018年フィリピン派遣 訪問箇所



位置No.	訪問地	訪問日	主な活動内容
1	マニラ首都圏	8月13日(月)	フィリピン赤十字本社訪問 台風の影響で午後の学校訪問はキャンセル
1	マニラ首都圏	8月14日(火)	学校訪問（サンタルチア高校） ソルトパヤタス訪問
2	バタアン州	8月15日(水)	サンギレルモ教会見学、バタアン支部、バタアン公立高校、大学訪問 ユースメンバー・支部職員との夕食会
2 3	バタアン州	8月16日(木)	バタアン朝市見学、サマット山戦争資料館見学、ゼロボイント等戦時中の遺跡見学 バタアン原発見学 バタアン支部ユースとの交流
1	マニラ首都圏	8月17日(金)	ラス・ピニヤス副支部訪問 リサイクル施設見学 モール・オブ・アジア見学 お別れ夕食会

6. 訪問日誌

【1日目】 8月12日(日) 天候: 晴れ(日本) 記録者: 齋藤 優真

●日報

集合

9:30 福島県支部
10:40 郡山駅
12:05 湯本IC柏屋駐車場
14:30 友部サービスエリア (昼食)
15:00 成田空港第二ターミナル
23:00 マニラ国際空港着
24:00 デュシタニ
マニラホテルチェックイン

免税店は有名高級店が並び土産屋なども多かった。

飛行機のフライト時間が2時間ほど遅れ5時ごろに搭乗した、その後飛ぶ寸前でトラブルがあり引き返して2時間ほど飛行機で待ち、7時ごろ日本を飛び立った。

飛行機内では、小型の画面で新作の映画や、テトリスや将棋といったゲームが完備されており快適だった。途中、積乱雲に入り多少機体が揺れたが特に問題なく安堵した。

約5時間のフライトを経てフィリピンマニラ国際空港に到着した。深夜1時ごろにホテルでミーティングをおこない明日の確認をし、就寝した。

みな移動で疲れていたのかすぐに眠りに落ちた。

●所感

フィリピン派遣初日、とにかく移動をする一日であった。それぞれの集合時間で集まり、フィリピンへ飛ぶ飛行機に乗るべく成田へ約5時間の移動。

SAで昼食をとった。飲食店は混んでいたのでパンなどを買って食した。思えば最後に日本で食べた物は日本食ではなかった。

成田空港に着くとまずその規模に驚いた。さすがは国際空港といったところか、とても大きく見渡せないほどだった。自分の荷物のチェックを行いバッテリーなどキャリーにつめない物などを仕分けた。その後一時間ほど空港内を散策した。写真を撮るなど思い思いの時間を過ごしていった。



元気に出発

訪問日誌

【2日目】 8月13日(月) 天候: 曇り(フィリピン) 記録者: 佐藤 涼香

●日報

- 6:00 起床
- 7:00 朝食 ホテルのバイキング
- 9:00 フィリピン赤十字本社訪問
- 13:00 赤十字本社で昼食 (ジョリビー)
- 14:00 フィリピン赤十字社本社訪問 (台風の影響で支部訪問は変更)
- 18:00 夕食
- 20:30 反省会・打ち合わせ

●公式訪問記録

【フィリピン赤十字本社訪問】



フィリピン赤十字本社にて

最初にフィリピン赤十字本社のアンさんから、フィリピンに被害が出た台風の話と台風被害について、フィリピン赤十字がどのような活動をしたのかをスライドで紹介して頂きました。「その台風は、中部のビサヤ地域を東から西に横切る形で通過し、約1,700人が住んでいる広い範囲の地域に対して、フィリピンの台風警報で最高段階にあたるシグナルNo.4が発令されたこと（シグナルNo.4とは、風速51m/s以上の風が12時間以内に予想される場合に発令される警報）その台風によ

り、死亡、行方不明者が1万人にのぼり、1,700万人の家屋が一瞬のうちに無くなつたこと。台風が去った後は、病人が多く出たという。特にインフルエンザ・デング熱・感染症（洪水に混ざっている小動物の排泄物の菌によるもの）によって多くの人を苦しめたと言う。またスライドの上下にあった、スローガンでもある「Volunteers+Logistics+Information technology=AlwaysFirst, AlwaysReady, AlwaysThere」という言葉も心に残りました。その後は、本社の中を案内していただきました。献血ルーム、血液を管理している装置、フィリピンの災害情報管理室などについて、丁寧に説明して頂きました。また、本社建物の前には、火事や事故の際に出動する救助車があり、その時の災害に対応して使う救助道具などを説明して頂いたり、実際に、体験したりしました。本社見学後は、昼食を取り、シイナさんと歌を歌ったり、踊ったりしました。本社局長の方に福島のお土産として「赤ベコ」を渡しました。また、福島県の高校生が取り組んでいる『1円玉募金』で集まったお金、日本円で10万円を贈呈しました。フィリピン本社からは「ライト」「ボールペン」が一つになったペンを頂きました。



1円玉募金、贈呈

フィリピン赤十字の活動にとても関心を抱き、楽しさを間近で見ることができ、とても勉強になりました。

【2日目のふりかえ（反省会）】

夕食後、ホテルに戻り、先生の部屋で一日の活動について振り返りました。一人一人から、反省



福島の現状やJRCの活動について説明

点、次の日の抱負を話し合いました。①学校交流でどんな状況でも披露できるように練習すべきだった、②学校交流の生徒の皆さんのお出し物のクオリティーが高いことに驚いた、③よさこいを上手く披露出来たのは良かった。また、一人一人の反省点から改善していこうという姿勢があったのは良かったと思います。



フィリピン赤十字の活動について説明を受ける



訪問日誌

【3日目】 8月14日(火) 天候: 曇り時々雨 記録者: 内儀 雪野

●日 報
6 : 00	起床
7 : 00	朝食（ホテル）
11 : 00	Sta.Lucia High School訪問
14 : 00	昼食（Mang inasal）
17 : 00	ソルト・パヤタス訪問
20 : 00	夕食（日本橋）
22 : 00	ホテル着

●所 感
------	-------

ホテルを出る時間が遅れてしまい、予定されていたケソン支部への訪問が中止になった。前日の学校訪問が台風の影響で休校になり中止になった

ので、現地の学校の生徒と交流するのは初めてだった。バスで移動しているときから学校が私たちを歓迎するためにお祭りのような状態になっていると通訳のリンさんから伝えられていたが、実際に見てみると想像していた以上の盛り上がりで、派遣メンバーはバスの中でその様子を見て驚きのあまり一瞬固まってしまった。フィリピンの人のおもてなしの心と明るくとても温かい人柄、輝く笑顔に感動した。学校訪問後はケソン支部のユースたちと食事をした。なかなか英語が聞き取れなかったり、間違った解釈をしてしまったり、上手く伝えられなかったりと、お互いに言葉の壁を感じたように思うが、お互いの伝えたい、知り

たいという思いが重なり終始和やか雰囲気だった。その後、パヤタス地区のソルトのスタディツアーに参加した。先ほどまでいた場所とのあまりの空気の違いに私たちはまた少し固まってしまった。振り返ると、3日目はフィリピン国内の光と影を1番目の当たりにし、その現実に派遣メンバーは精神的にショックを受けたように思う。その後バスの中で振り返りをした。1人1人の言葉から意識の変化を感じた。

●公式訪問記録

〈StaLuciaHighSchool訪問〉

私たちにとって初めての交流会だった。現地の学生はどんな子たちなのかメンバーは全員楽しみにしていた。学校につくと、私たちの想像をはるかに超えた歓迎を受けた。私たちがバスから降りると悲鳴のような歓声が上がったことに私は驚きを隠せなかった。フィリピンの人にとってはこの歓迎は普通なのだろうか、日本でここまで歓迎はなかなか見られないと思う。彼らと関わったことで私はとても明るくなれた気がする。笑顔は伝染するというがその通りだと思った。フィリピンの人の明るさや優しさに触れることができて嬉しかった。また、交流のパフォーマンスを披露するのも初だったが、私たちの発表の前に現地の学生がお祭りで踊るという素晴らしいパフォーマンスを見てしまったため正直とても恥ずかしかった。



初めての交流会での自己紹介、緊張しました



民族衣装に身をつつんだ学生

しかし、これをきっかけに色々と工夫できたので良かったと思う。その後のケソン支部ユースとフィリピンスタイルのお店で食事をした。派遣メンバーはタイ米が苦手な人が多かったが、慣れてきたのかこのお店ではおいしく食べることができた。また、ユースに教えてもらいながら手で食べるという食べ方を経験した。日本でもお寿司などを手で食べることがあるので簡単だと思っていたが、手からポロポロと落ちてしまい意外と難しかった。しかし、とても良い経験ができた。

〈ソルト・パヤタススタディツアー〉

食事のあとはパヤタス地区のゴミ山といわれる場所でのスタディツアーに参加した。先ほどまでと、あまりに違う空気に息をのんだ。私たちの知らない当たり前がそこには広がっていた。しかし、パヤタス地区で暮らす人々は私の想像とは反対にとても明るかった。道のいたるところで子供たちの笑顔を見ることができた。家庭訪問で出会った家族は5人家族で1か月約3,000円の生活をしていると聞いた。その家族もとても明るかった。その家のプリンセスちゃんという支援を受けて学校に通っている女の子が学校に行くのが1番楽しいと言っていた。彼女のキラキラとした目を私は忘れられない。彼らにこれからどんな未来が待っているのだろう。きっと彼らの笑顔の裏側には私たちには想像できない苦しい現実がある。生まれた

場所が違うだけ。たった数時間しか離れていない場所でなぜ苦しまなければいけない人たちがいるのか、この現実に私たちは何ができるのか、何をしなければならないのか。私たちが向き合わなければいけないと思う。その後、日本橋という日本食のレストランでソルト・パヤタスにインターンで来ている大学生の方も一緒に夕食を食べた。な



パヤタス地区家庭訪問

ぜフィリピンに来たのか、そしてなぜソルトを選んだのかなど、いろいろな話を聞くことができた。世界に目を向けて自ら行動を起こしている日本人の方を身近に感じることができ、とても勇気をもらった。決して簡単なことではないと思う、けれどいつか自分もそうなりたいと思った。



パヤタス地区



訪問日誌

【4日目】 8月15日(水) 天候: 晴れ 記録者: 斎藤 優真、原 大河

●日報

- 6:00 朝食
- 7:00 ホテル出発（チェックアウト）
- 7:20 ユースメンバーと合流
- 8:30 サンギレルモ教会
- 10:30 バタアン支部
- 12:00 支部職員、ユースメンバーとの昼食会
- 13:00 ユースメンバーとの交流ゲーム
- 14:00 バタアン公立高校訪問、交流会
- 16:00 ペニンスラ大学訪問、交流会
- 19:00 支部職員、ユースメンバーとの夕食会
- 21:00 ホテル到着、ミーティング

●所感

今日はバスでの移動が多く、疲れのせいか移動中寝ている人が多かった。

サンギレルモ教会は1991年6月のピナツボ火山で埋もれたようだが、住民の手によって掘り起こされ今に至るらしい。火山灰に埋もっていても壊されないのは、人々のよりどころだからだろうなと思った。

バタアン支部では活動内容についてのお話を聞き、その後、集合写真を撮影した。

昼食会場に着き、日本メンバーは自己紹介をした。何度か自己紹介をしてきたこともあって、みんな慣れてきているような感じがした。昼食中

は、ユースメンバーと趣味についての話や恋愛についての話で盛り上がった。積極的に会話することができて良かった。昼食後は、交流ゲームをして友情を深めた。リズムゲームや良く分からぬ踊りをするゲームがあって、とても楽しかった。フィリピンの人のノリの良さを感じることもできた。

バタアン公立高校に着くと、歌や踊りでの歓迎をしてくれた。この日のために練習をしっかりしてきたのだなと感じられた。それに対して、こちらはダンスと書道とよさこいを披露した。かなりぐだぐだした発表となり申し訳ない気持ちでいっぱいだった。交流が終了すると、2日目の交流会とは違ってサインや写真をあまりお願いされなく、少し寂しかった。

大学での発表では先ほどの反省を生かし、書道とよさこいを披露した。笑ってくれたり、動きをまねしてくれたりとうけが良くて嬉しかった。交流が終了すると、名前を漢字で書いてとたくさんお願いされた。

この日泊まるホテル近くのレストランでの夕食は野菜がたくさん入った鍋、チャーハンなど食べたことのある料理で安心した。料理に出てきた唐辛子のようなものを食べ、辛いリアクションをとるとユースメンバーは大笑いしていた。ユースメンバーからはネックピローをプレゼントしてもらった。移動が多い僕たちにとって、とてもありがたいものだった。食事が終わると、ユースメンバーと写真をたくさん撮った。これでもかというくらい写真を撮っており、フィリピンの人は本当に明るいなと思った。

●公式訪問記録

〈サンギレルモ教会〉

この教会は所感にもある通り、火山灰で埋まってしまった教会であった。教会の上に新しい教会が建てられ、灰の下の教会は塔が多少確認でき、

灰から出ている部分は水没していた。中にはキリスト教にまつわる像が複数体と何枚かの絵が展示されていた。泣いている像や、はりつけの像、横たわる像など様々であり、絵は風景が多くかった。聖堂に入ると広い為か開放的な気分とともにいつそう神聖な雰囲気が広がった。手を合わせ祈ることも行ってみた。教会内には何人かの教徒が像の前で手を合わせていたり、恋人と死別したかのように横たわる聖人像に涙していたりする人も居た。キリスト教ではないが宗教の一端に触れ、メンバーもなにか感じることもあったようだ。



サンギレルモ教会

〈バタアン支部〉

バタアン支部に到着すると大きくWELCOMEの文字が書かれた横断幕が張られていた。少々雨が降っていたこともあり、職員の皆さんのが室内でバタアン支部にいるメンバーの説明をしてくだ



バタアン支部

さった。支部長や献血の女医さんがいつもいて、冗談まじりに吸血鬼だと言っていた。台風の被害が出た場所へ支援に出かけた方々もいるようで、それほど大人数ではなかった。その後、雨が強くなってきて、早々に写真を撮りその場を後にした。

〈交流会～食事会〉

バタアン支部のユースメンバーの待つ食事会場にバスで移動した。その日宿泊するホテルの食事会場であった。三つのテーブルにメンバーを分け、間を挟むようにユースメンバーと座った。

始めに自己紹介を行った。タガログ語を使った挨拶が通じたり通じなかつたりしたことに一喜一憂しながら、おのおの用意していた自己紹介を行った。その後、バタアン支部で行っている活動をスライドを使って説明してくださった。活動は幅広く、献血、募金の呼びかけ、災害支援派遣など多くの活動を行っていることが分かった。中でも驚いたのは水泳の授業のボランティアを行っていたことだ。学校で水泳の授業が無いのでこうしてRCYのメンバーが教えているとのことだった。

集合写真を撮ったあと昼食となった。やはり日本とは違った味に好き嫌いもあったようだ。キュウリを使ったジュースにはとても驚かされた。食事を終えると各テーブルでレクリエーションを行い、リズム系のレクリエーションで一気に親睦が深まった。



バタアン支部の皆さんと昼食会

〈バタアン公立高校訪問〉

二回目となる学校訪問で、まず生徒たちによる演奏で出迎えていただいた。ステージ上でギターや見たことの無い楽器を巧みに使いこなしていた。まず、農村の民族ダンスを見た。三組の男女がきれいに踊り、一見するとストーリー性のあるミュージカルのようでもあった。

その後、有名なバンブーダンス体験した。トントンタンの3拍子のリズムで2本の竹を開閉しその間に足を入れ踊るダンスだった。竹に挟まれるメンバーもいたが、皆、楽しく踊った。自分たちの発表を行い、よさこいを体験型として行った。



バタアン公立高校 バンブーダンス

〈ペニンスラ大学〉

この大学では最初にユースメンバー達が行っている、RCYの現在の活動やこれまでの活動をパワーポイントで説明してくださった。ユースメン



よさこいを披露

バーは練習していたダンスを披露してくださり、その後日本メンバーも先の高校と同じようによさこいを披露し、大学の教授達と一緒に踊った。ここでも書道で教授の名前を書いたが、やはり好評だった。その後、ユースメンバーお手製のスペクティとポテトチップをいただいた。最後にはトピックアルバムを渡し、ユースメンバーと大学を後にした。

〈支部職員 ユースメンバーとの夕食会〉

ホテルで小休憩を挟み、向かいの鍋料理店でメンバーと食事をした。大人の方々は先生方と、高校生メンバーはユースと交互に座った。この食事会ではユースメンバーと楽しく交流することができ、首が楽なクッションをいただいた。写真を数多く撮影し、最後は集合写真を撮ってその場を後にした。



訪問日誌

【5日目】 8月16日(木) 天候: 晴れときどき雨 記録者: 星 南充

●日 報

6 : 30	起床
7 : 00	朝食
7 : 50	バタアン朝市見学
9 : 00	ホテル発
10 : 20	サマット山戦争資料館見学
12 : 00	ゼロポイントモニュメント・フレンドシップタワー見学
12 : 10	昼食
13 : 00	バタアン原発見学
15 : 00	バタアン支部ユースとの交流
20 : 00	夕食 (マニラ市内 日本食レストラン)
22 : 00	ホテル着、ミーティング

●所 感

私たちは、ホテルで朝食をとるとすぐにバランガマーケットを見学した。市場は地元の方々で賑わっており、衣服、日用品、食品などが売られていた。マニラ市内で目にした、ショッピングモール等とは違い現地の方の生活に馴染んでいるようを感じられ、生活の営みそのもののように思えた。また、行き帰りの交通手段に、フィリピンで

タクシーの役割を担っているトゥクトゥクに乗ることが出来たので、現地の生活を体験する本当に良い機会となった。その後私たちは、サマット山戦争資料館見学、ゼロポイントモニュメント・フレンドシップタワー見学を通して、日本人が行った残虐な行為を目の当たりにすることになった。戦争資料館と一緒に見学したユースメンバーが、一つ一つの資料について丁寧且つ熱心に説明してくれたのが印象的だった。ユースメンバーの中に



バタアン朝市

は、親類がフィリピン軍兵として戦争に参加した方もいることを知った時、自分達が歓迎され、一緒に交流できるということがどんなに有難く素晴らしいものなのかなに思い至り、これから先も日比の友好関係がより一層深まっていってほしいと強く思った。バタアン原発見学は、当初の予定では、原子力発電の仕組みやフィリピンの原子力計画など、バタアン原発に関する説明を施設の方から受けた後、発電所内部の見学を行うこととなっていた。しかし、発電所内部を案内してくれる担当者の不在、施設の方の説明中に停電が起きる、といったアクシデントが重なってしまったため、十分な研修が出来たとは言えなかった。しかし、折しも発電所でバタアン州に来て二度目の停電を経験したため、自然とエネルギー問題に思いを馳せることとなった。また、予定の変更によって空いた時間にユースメンバーにフィリピンの伝統的な遊びを教えて貰い、交流を深めることができたのは良かったと思う。

●公式訪問記録

〈サマット山戦争資料館〉

ホテルでバタアン支部のユースメンバーと合流し、バスでサマット山へ向かった。サマット山は標高554メートルで第二次世界大戦中にアメリカ・フィリピン軍の軍事要塞として使われた。現在は、山頂に「勇者の廟」と呼ばれる、約100メートルの巨大な十字架が建てられている。また、地



サマット山戦争資料館

下に戦争資料館があり、戦時中撮影された悲惨な写真、戦争で使用された銃などの武器、軍服などが展示されていた。

〈ゼロポイントモニュメント・フレンドシップタワー〉

次に見学した、「Death March (死の行進)」のスタート地点とされる「0 km」地点には、石碑が建てられており、ゼロポイントモニュメントと呼ばれている。「Death March (死の行進)」とは、第二次世界大戦中に、アメリカ人捕虜やフィリピン人捕虜を収容所に移動させるために、日本兵が十分な食料や水を与えずに約120kmの道のりを歩かせたことを指し、戦時中の日本兵がフィリピンでおこなった中で最も残虐な行為だとされている。ゼロポイントモニュメント見学後は、フレン



ゼロポイントモニュメント



勇者の廟

ドシップタワーを訪れた。そこには、戦後30年に、懺悔と日比友好の願いを込めて日本が贈った鐘が吊り下げられており、日比友好の象徴になっている。私たちは、フレンドシップタワー敷地内でユースメンバーと交流しながら昼食をとった。

〈バタアン原子力発電所〉

バタアン原発は、設立されてから一度も稼働したことが無い原子力発電所だ。稼働させない理由は、1979年に起こったスリーマイル島事故に起因している。私たちは、原子力発電の仕組みやフィリピンの原子力計画について施設の方からスライ

ドを使った説明を受けた後、発電所の警備体制と設備の一部を見学した。



バタアン原発



訪問日誌

【6日目】 8月17日(金) 天候: 晴れ

記録者: 内儀 雪野、小泉 胡春

●日 報

- 6:30 起床
- 7:00 朝食
- 9:00 ラス・ピニヤス副支部訪問
- 10:00 リサイクル施設見学
- 12:30 昼食（ユースメンバーと）
- 14:00 モールオブアジア見学（各自お買い物）
- 19:00 お別れ夕食会
- 21:00 ホテル着

●所 感

今日は最後の支部訪問やお別れ夕食会があるということもあり、朝から不思議な緊張感があった。支部についてからの活動はとても満足のいくものとなった。最後にしてようやく納得がいくものを披露することができて、本当によかった。

リサイクル施設では、ごみを再利用して学校の椅子を作っている様子を見ることができた。フィ

リピンの貧困を強く感じた出来事でもあった。日本との違いを目の当たりにし言葉を失ってしまったが、絵本や教科書では学ぶことができないものを自分の目でみることができたのは良い経験だったと思う。



モール・オブ・アジア



ラス・ピニャス副支部の皆さんと昼食会

昼食では、みんなユースメンバーと積極的に話すことができている様子を見て、初日に比べてコミュニケーション力がとても成長したと思った。

モールオブアジアでは疲れを忘れて、各自いいお買い物ができた。モールオブアジア内は本当に広くて、見るもの全てが素晴らしい映った。

夕食会場に着き、フィリピンでの最後の夕食をとった。お店の方の素晴らしいダンスや歌を楽しみながら食事をすることができた。私たちもダンスを誘われ、踊ったが日本ではありません事だったため少し恥ずかしさが出たが、楽しむことはできていたと思う。お別れの寂しさがあったが、最後にいい思い出を作れたと思う。

今日は“最後”という言葉に後押しされて、活動全てに全力を尽くすことができたと思う。

●公式訪問記録

〈ラス・ピニャス副支部訪問〉

まず私たちはラス・ピニャス副支部を訪問した。最後のパフォーマンスということもあり、特別な思いをもって披露したパフォーマンスは、最高のものになった。

振りを忘れたり、音とダンスが合わなかったり、ダンスの動きが小さかったり…。何一つとして満足いかなかったパフォーマンスは、最後には私たち自身も、現地の方にも笑顔になれるパフォーマンスをすることができた。私は、パ

フォーマンスが終わり見てくださった支部の方の顔を見た時、泣きそうになった。皆でホテルの部屋に集まって深夜まで練習したことや、バスの中で反省したことなど、このパフォーマンスに辿り着くまでの思い出が顔を見た瞬間に一気によみがえってきた。

この時から私は、これからどんなに辛いことがあっても、その先にある一瞬の感動のために何だって頑張ることができる気がした。



書道パフォーマンス

〈リサイクル施設〉

次にリサイクル施設に行った。そこでは学校や会社からでたプラスチックのごみで学校で使用される椅子を作っていた。その様子を見た時私は、胸が痛くなった。

私たちが日本の学校で使っている椅子とは違いすぎて言葉を失った。

ネジや留め具を一切使わず、パーツをはめ込んで作られているため安全性は極めて低いように思えた。だが、使えるものを捨てずに再利用し、フィリピンの子供の役に立っていると思うと何だかとても優しさを感じた。フィリピンの温かさを感じることができて本当に良かった。

〈サン・アグスティン教会〉

ユネスコ世界遺産に登録されているサン・アグスティン教会に行った。中には入ることができな

かったが、外から中で現地の方がお祈りしている様子を見ることができた。中の静けさが神聖さを引き立たせ、外から見ていた私たちに重く伝わった。約440年の歴史を深く感じることができる素晴らしい遺産を見ることができて本当によかった。



イスの原料となるプラスチックごみ



プラスチック製イス



ウォーターヒヤシンスから工芸品を製作

〈お別れ夕食会〉

フィリピンでの最後の夕食はsinging cooksというお店でとった。食事をしながら、お店の方のダンスや歌などのショーを楽しむことができた。私たちもお店の方に誘われ一緒に踊った。参加しながらご飯を食べができるのは素晴らしいと思った。

また、現地の方と一つになれた瞬間でもあり、一体感を感じることができた。

次の日には日本に帰らなくてはいけないため、寂しさが混じりつつも一緒にいたユースメンバーと記念撮影をしたり、ゲームをしたり、楽しく過ごすことができた。

この日は楽しさと寂しさが混じった複雑な夜だった。



*ウォーターヒヤシンス

繁殖力が強く、枯れた茎などが河川の汚染や水害につながることから、茎を集めて乾燥させかごなどの工芸品を制作販売している

訪問日誌

【7日目】 8月18日(土) 天候: 晴れ 記録者: 原 大河

●日報

5:30 起床
6:00 朝食
12:00 ホテルチェックアウト
12:35 マニラ国際空港 到着
19:30 マニラ国際空港 出発
24:00 成田国際空港 到着
1:00 ホテルチェックイン

た。空港に到着すると、大勢の人たちがいた。一つのトラブルで多くの人の予定がずれるのだと感じた。到着してから出発までの時間は、立ちっぱなしでの待機となり肉体的にも精神的にも疲れた。ようやく、飛行機のシートに座れた時の安心感は今でも忘れられない。飛行中は、待機での疲れのせいか爆睡していた。そして、成田空港に到着すると、日本人がたくさんいて感動した。なにより、日本語で会話出来る喜び、即時に意思を伝えられる幸せを物凄く感じた。それから、ホテルに着いたのが深夜1時だった。部屋に入り、シャワーを浴び、明日に向け、すぐに眠りについた。

●所感

昨日、中国で滑走路のトラブルがあったそうで本来の予定とは全く違う一日になった。午前中は、ホテルでの待機となった。久しぶりのゆったり出来る時間で、しっかり疲れをとることができ



滑走路のトラブルで待機している様子

フィリピン派遣に参加して

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校 3年 佐 藤 涼 香

私は、青少年赤十字社福島県支部の事業の一環であるフィリピン派遣研修に、8月12日から19日の7日間、県内のJRCメンバー6名でフィリピンを訪れた。この研修は、青少年赤十字の実践目標の一つでもある「国際理解・親善」を果たす目的も兼ねていた。

私は、2年生になってから校内のJRC部に所属し、様々な活動を通してコミュニケーションの難しさ、積極的に行動すること、相手のことを考えて行動することの大切さ、「気づき・考え・実行する」という青少年赤十字の態度目標などを学んだ。私は英語が苦手で、簡単な英語しか話すことができず、言葉が通じない相手とコミュニケーションをはかることができるか不安であったが、ジェスチャー、アイコンタクト、笑顔を通してコミュニケーションをとることができ、JRCで学んできたことを生かすことができた。

フィリピンで過ごした7日間を振り返って見ると、毎日新しい発見があり、自分の価値観を覆された。フィリピンに着いて最初に驚いたのは、交通量が多く、車と車の距離感が近くホテルに着くまでに事故にあってしまうのではないかと怖い思



いをした。また、信号機がないことから車と車の距離も近くなり事故を起こす確率も多くなってしまうのではないかと気づくことができた。

2日目は、フィリピンにあるファストフード店Jollibeeで、フィリピンのお米をたべてみると、ポロポロして食べにくく、タイ米に近い感じのお米で日本のお米が恋しくなった。

3日目は、ソルトに行きゴミ山を見学したり、家庭訪問をした。ゴミ山が存在せずに、フィリピンに大きな格差がなかったら、このような事故が起こることがなかったのではないかと考えると、とても胸が締め付けられる思いをした。

4日目、5日目はバタアン支部の方々とユースメンバーと共に過ごした。この2日間では学校訪問に加え、サマット山、第二次世界大戦中に日本軍がフィリピン人に強いた、いわゆる「死の行進」のゼロポイントやフレンドシップタワーを訪れ、バタアン原発を見学した。どれも貴重な体験ばかりでとてもためになった。また、若い人にとって



○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

戦争は遠い歴史の一部になっていると感じることができた。私は、戦争の展示物見学の際に、戦争で使用していた武器や自分の命を犠牲にして国を守ってくれたひとなどの写真を目にし、改めて戦争の悲惨さを身に染みて感じた。

実質的に最後の活動となった6日目は、ラス・ピニヤス支部に訪問したり、リサイクル施設の見学をした。リサイクル施設の見学で印象に残っているのはペットボトルを何個も使って作った救助用の船だ。日本では見たことがなかったのでとても新鮮で興味深かった。またフィリピンの方々が考える能力も高いことに気づくことができた。

フィリピンで過ごした7日間を振り返ると、日

本では当たり前だと思っていたことがフィリピンでは当たり前でなかったり、私の英語力が未熟であってもフィリピンの方々は、温かく歓迎してくださったり、家族のように接してくれた。そうしたフィリピンの方たちの優しさ知ると同時に、コミュニケーションを取ることの難しさや、環境が異なる海外では、臨機応変な行動が求められることを学んだ。これらの経験をこれから生活していくなかで生かしていくべきだと思った。そして、自分が伝えたいことや相手の質問に自信をもって答えられるように英語力を身につけ、近い将来、フィリピンで出会った人々に会いに行き交流したいと考えている。



フィリピンでの貴重な7日間

学校法人松韻学園福島高等学校 2年 原 大河

今回のフィリピン派遣研修は初めての海外ということもあり、不安なことばかりだったが、実際にやってみると、学ぶことが多く、そして現地の方との交流が楽しく、この7日間はあっという間に過ぎていった。

まず、フィリピンに到着して交通の面に驚かされた。信号機や標識がほとんどなく、車間距離もほんのわずかしかなく、事故が起きるのではないかと不安であった。案の定、事故現場を目撲して交通整理の改善が必要であると感じるとともに日本の交通整理の徹底ぶりを誇らしく思った。

今回の研修では、フィリピン赤十字本社をはじめとして、いくつかの支部を訪れ、フィリピンの赤十字の歴史や活動の内容を知ることができた。献血活動や支援活動など日本と同じ活動があり、同じ赤十字としてしっかり繋がっていると感じた。本社では社内を案内してもらい、初めに災害



発生時のオペレーションを見学させてもらった。ここでは、国中の情報がSNSなどを通じた一般の人たちから集まっているそうだ。国中から集まつた多くの情報を処理するのには、かなりの労力が必要だろうなと感じた。次に献血ルームに案内してもらい、フィリピンでは20代から30代の人が多く献血をしているとのお話を聞き、40代からの献血者が多い日本との大きな違いを感じさせられ

フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

た。僕の高校では校内献血活動を行い、多くの生徒に献血をしてもらったのだが、日本全体で若い世代の人たちに積極的に献血をしてもらうには何が必要なのかを考え、そのためには献血についての正しい知識を一人一人が身につけるべきだと思った。



また、フィリピンでは3つの学校を訪問し、交流することができた。どこの学校を訪ねてもフィリピンの人たちは熱烈な歓迎をしてくれた。あまりにも素敵な歌やダンスの歓迎に僕たち日本メンバーはとても感動させられた。それに対し、こちらが披露したよさこいの完成度では申し訳なさを感じた。交流会が終了すると、たくさんの生徒から写真やサインをお願いされ、スターになった気分を味わうとともに、フィリピンの人たちの積極性に圧倒された。また、バスでの移動中もフィリピンの人たちはずっと陽気にお話をしていて、これが国民性の違いなのかと実感した。

ほかにも、ゴミの山で人々が生活をしている地域も訪問することができた。貧困地区であるパヤタスというところだ。到着し、バスを降りた瞬間から異質なにおいがしたことを今でも鮮明に覚えている。フィリピンでは、ゴミを焼却処分することは有害物質を発生させるため禁止している。そのため、特定の場所に埋め立てる形でゴミを処理している。そうして、次々に積み上げられ山となったのが、パヤタスにあるのだ。実際に見てみると、映像で見るのとは全く違って、かなり高く

て広い印象があった。パヤタス地区を支援するNPO団体ソルトパヤタスの案内で、実際に家庭を訪問することができた。そこで僕は子供の親に対して、幸せを感じるときはいつですか、夢はなんですかという質問をさせていただいた。幸せを感じるときは自分の子どもに勉強を教えているとき、夢は自分の子どもが小学校から大学まで卒業してくれること、と答えてくださった。自分はこの家族に対して何ができるのか、貧困問題に対してどう行動すべきなのか考えさせられた。

また、第二次世界大戦の遺跡等が残っているバタアン州という地域も見学することができた。バタアン州には、「死の行進」のスタート地点であるゼロポイントがある。「死の行進」とは第二次世界大戦中、日本兵が降伏したアメリカ人やフィリピン人の捕虜を収容所へ移動させるとき、十分な食料や水を与えず約120km歩かせ、大勢の死者を出したものである。こんな非人道的な行為は許されるものではないと強く感じ、日本人として恥ずかしい気持ちになった。しかし、そんな過去があったにも関わらず、フレンドシップタワーというものが建てられ、大きな鐘に友好と平和を願う言葉が刻まれていた。日本との和解を願うフィリピン人の心の広さ、温かさを感じさせられ、戦争を二度と起こしてはいけない、風化させてはいけないと心に思った。そして、これからもフィリピンと日本が友好な関係であり続けて欲しい、そう願った。

今回書くことができたもの以外にも、リサイクル施設やサンギレルモ教会など多くのところへ行き、学んだり感じたりしたことがたくさんあった。そして、今回の派遣が意味のあったものになるように、得たものを一人でも多くの人に伝えたり、今後の活動や日々の生活に生かしたりする義務があると思う。

所 感

福島県立郡山北工業高等学校 齋藤 優真

私は、8月12日～18日の7日間、日本赤十字社主催のフィリピン派遣に参加し研修を行った。初めての海外、初めての飛行機、タガログ語など、多くの不安要素もあったが、なかなか経験できないことでもあり、意を決して応募に至ったことを覚えている。

本格的にフィリピンの人々と交流をし始めたのは2日目からだった。フィリピンのRCY (Red Cross Youth) は、日本のJRCとは活動の規模も年齢層も全く異なるもので、JRCが幼・小・中・高校生を対象としているのに対しRCYは7歳～30歳のメンバーが各支部の「運営」として携わっている。私たちが訪れた日、フィリピン赤十字本社では約8割のメンバーがボランティアであった。

3日目からは学校訪問を行い、クオリティの高いダンスや歌、その他諸々の出し物に圧倒され自分たちの出し物が貧弱なものだと強く感じた。フィリピンの学校は小中高一貫校のようで、小さい子から年上のメンバーまでその学校で学んでいた。

また、3日に最も衝撃を受けたのは、ソルトパヤタス地区に行ったことだ。もともと、ソルトパヤタスのことは事前研修や自己研修等で聞いていたが、画像で見たものより鮮明にかつ立体に、そして五感を通して感じたことが私の衝撃をより加速させた。バスを降りた瞬間から異臭を感じたことを覚えている。この地区でNGO「ソルトパヤタス」という日本の団体が活動している。ここで活動している日本人はインターンの一環でこの活動に参加していた。フィリピンの貧困問題を解決するべく活動に取り組んでいた。この団体は職のないソルトのお母さん達に刺繡の仕事を提供し



ており、この活動がソルトを支える一つの柱になっていることが実感できた。

このソルトパヤタスツアーの中で家庭訪問を行った際、お母さんに夢はありますか?と聞いた。すると、『私自身に何かになりたいという夢はありません。しかし子ども達が自分の夢を叶えることは私の夢です。』と答えてくれた。また、幸せですか?と質問した際に『子ども達と過ごしている時間はとても幸せです。』と答えてくださったことはとても印象的だった。

4日目、5日目はバタアン支部を中心とした活動だった。多くのユースメンバーと交流し、サマット山の資料館ではわかりやすい英語に囁み書き一つ一つ教えてくれた。日本軍が攻めこみ、フィリピン人が多く亡くなっているにもかかわらず、そのユースのメンバーが自分たち日本人に笑って教えてくれていることに心を強く痛めた。

最後の6日目、ラス・ピニヤス副支部での活動ではペットボトルをリサイクルした船や水草を利用したかごなどを見学した。大きなマットは作るのにかなりの時間がかかるらしい。

この研修の中で多くのことを肌で感じ、頭を悩ませ、自分に何ができるのだろうと考えた。今も

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

まだ結論は出ていないが、フィリピンという国を見て、現状を理解した今の自分自身には「考える」ということができる。今回、フィリピンに訪れ、貧困問題を見て、自分に何ができるのか模索する

機会を得ることができた。だから私は今後この研修で得た経験を生かすとともに自分にできることを実行していきたいと思う。



フィリピン派遣で感じたこと、そしてこれから

福島県立白河旭高等学校 3年 内 儀 雪 野

8月12日から18日にかけてフィリピン派遣に参加了。私は将来、看護師になりたいと考えており、災害看護・国際看護の分野に興味を持っていたため、自然災害の多いフィリピンでの赤十字の活動や発展途上国の格差、貧困問題の現状、文化の違いなどについて自分の目で見て考え、国際理解を深めたいと思い応募することを決意した。フィリピンでの1週間は、間違いなく私を大きく変えてくれた。この派遣に参加することができて良かったと心から思う。

私がこの派遣の中で1番印象に残ったことはフィリピンの貧困問題についてだ。車が途切れることなく行き交う道路の真ん中で花を売り歩く幼い子供の姿。道に座りこみ車に向かって手を伸ばす女性の姿。出発前にフィリピンについて調べていたが、実際にその光景を目にするとすべてが衝撃的だった。悲しいことにフィリピンの国内には私の想像を超えた生活の格差があった。私たちが滞在した首都のマニラのマカティという地区は、高層ビルが立ち並び開発が進められていた。しかし、そこから少し離れたパヤタス地区は非常に対照的で、安全面や衛生面そして経済的にも決して恵まれているとはいえず、5人家族で1か月約3,000円、1日になると約100円で生活しているという家族と出会った。話を聞く中で、日本で私が感じる“あたりまえ”とこの地区の人たちが“あ

たりまえ”と感じていることのあまりの違いに心が痛んだ。パヤタスでみた子供たちの笑顔が忘れない。家庭訪問で出会ったソルト・パヤタスという認定特定非営利活動法人の教育支援事業を受け、学校に通っている女の子が学校に行くのが1番楽しいと話してくれた時のキラキラとした目が忘れない。その笑顔の裏で、彼らは私たちが考えるよりもずっとずっと苦しい生活をしているだろう。しかし、私にはその裏側を想像することができなかった。自分が生きてきた世界の小ささを痛感した。それと同時に、彼らの笑顔をそして夢を守りたいと思った。私たちはたまたま日本に生まれて、彼らはたまたまフィリピンに生まれた。この“たまたま”でなぜ苦しまなければならぬ人がいるのか、なぜこのような格差が生まれるのか、帰国してからもずっと考えているがまだ答えは出ない。他国こののような状況を直接見る



○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

機会を頂けたからこそ“これから”が大切だと思っている。この派遣の中で、たくさんの疑問と格差や貧困の問題に対して何もできない自分、何も知らない自分の無力さに歯がゆさを感じた。しかし、大変な状況の中でも常に笑顔と優しさを忘れず助け合って生きているフィリピンの人の温かさや、彼らの生活を変えようと活動している日本人の方々を身近に感じることもでき、たくさんの勇気をもらった。この派遣で見たもの、感じた想いを決して忘れず、これから自分にできることは何か、やらなければならぬことは何かを考え続

けていきたいと思う。

1週間のフィリピンでたくさんの出会いがあつた。言葉の壁も文化の違いもたくさん感じたけれど、それは決してマイナスなことではなく、彼らが私たちを知ろうとしてくれて、私たちが彼らをもっと知りたいと思ったからこそ分かり合えた瞬間がたくさんあった。彼らの優しさと明るさ、そして笑顔に助けられた1週間だった。私たちと関わってくださったすべての人に感謝を伝えたい。そして、いつかまた自分の足でフィリピンを訪れたいと思う。



派遣報告～目で見て、肌で感じるということ～

福島県立会津学鳳高等学校 3年 星 南 充

私は8月12日から8月18日までに、フィリピンで多くの事を学ぶことが出来た。もし、今回の事業に参加しなかったなら、一生出来なかつであろう貴重な体験をした濃密な7日間となった。そう思うに付けても、私はフィリピン研修を通して、物事を実際に体験・経験することの大切さを思い知らされた。

今回の研修では7日間の日程で、フィリピンにおける、赤十字・ユースボランティアの活動、平和学習、教育の重要性、格差社会の実情、エネルギー問題、環境問題、国際交流の重要性、などを学んだ。全ての活動が有意義なものとなり、また、驚きの連続であったが、私は特にパヤタス地区の見学で大きな衝撃を受けた。と言うのも、自分が予め想定していたことと実際体験したことのギャップが大きかったからだ。パヤタス地区は、焼却処分できないゴミが積み重なってできたゴミ山があることで有名だ。ゴミ山から資源となりうるゴミを拾い売却することで生計を立てている方

など、所謂貧民層の方々が暮らす地域である。私たちは、パヤタス地区で活動している日本のNGO「ソルト・パヤタス」の現地体験プログラムに参加し、ゴミ山の見学、家庭訪問などをさせていただいた。パヤタス地区に関する大まかな情報は、日本でも事前研修で知ることが出来た。だが、実際に体験する前は、パヤタス地区と聞いてもバラック作りの家屋や、ゴミ山をほんやりと思い浮かべるだけで、実際の様子は想像することが



現地の高校生との交流



○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

出来なかった。そのため、バスから降りたった時は通りの様子に大変驚いた。人々の往来は活気に溢れ、小学生くらいに思われる子供たちが道のいたる所で遊んでいるのが見られたからだ。事前研修で学んでいたゴミ山についても驚くべきことがあった。事前研修の時に見た写真では、ゴミが表面に露出していたが、実際に目にしたゴミ山は、樹木に覆われており、一見した所、普通の山と見分けがつかなかったからだ。倒壊を防ぐことを目的として今年に入ってから植樹がなされたこと、今後は観光資源にするのを目標としていることは、対象を目で見て、現地の方と交流する中で初めて知ることになった。また、パヤタス地区の活気溢れる通りや店先、逆に狭く湿気の多い路地や常に薄暗く肌寒い家屋の様子は自分の肌で感じなければ、実感として理解することは難しいだろう。今回の研修では、パヤタス地区での活動だけでなく、事前の想像と実物とのギャップや、写真では伝わらない、音や匂い、温度などに驚かされた。そのため、研修中は常に自分の目で見て、肌で感じ、鼻で嗅ぎ、耳で聞くことを意識した。そして、決められたプログラムの中ではあったが、フィリピン派遣というまたと無いチャンスを最大限に活かすためには、出来る限り積極的且つ能動的に活動に取り組み、“体験すること”に貪欲であることが大切だと気付いた。

その反面、自分の知識不足を痛感する場面も多



植樹されたゴミ山

かった。こうした場面では、事前に必要な知識をインプットしているかどうかが、何かを体験した時に何を感じどう考えるのかに密接に関係するのだと気付かされた。私は、今回のフィリピン派遣を通して以上のように考え方することが出来た。思えば、JRCの活動は普段の学校生活では体験できないことや講演を聴く機会に恵まれている。これからJRCの活動にはフィリピン派遣で学んだことを生かし、積極的で能動的な姿勢で臨み、新しいことを“体験すること”に貪欲であり続けたいと思う。

私はフィリピン派遣を通して、多くのことを吸収し成長することが出来たように感じる。最後に、このような貴重な経験をさせて下さった日本赤十字福島支部の方々、先生方、フィリピンの方々、そして共に学んだかけがえのない仲間に感謝の意を表したい。

派遣報告

福島県立いわき総合高校 1年 小 泉 胡 春

今回のフィリピン派遣の活動を通して学んだことは、大きく3つあります。

1つは、違います。日本では当たり前に出会ったばかりの人と挨拶でハグをしたり一緒にダンスをするという文化はありません。そのため、日本の当たり前の文化に慣れてしまっていた私は、そのようなフィリピンの文化に戸惑ってしまいました。

もちろんそれは、私たち日本人だけではなくフィリピンの方達も異国の私たちの言語・行動に戸惑っていたのかもしれません。ですが、今回の派遣研修ではお互いの違いをお互いに受け入れて、絆というものができました。違いを通して生まれる友情、絆というものを学ぶことができました。

2つ目は、フィリピンの現状です。私は今回訪問するまでフィリピンの現状を知ることはませんでした。私が感じたフィリピンの現状は想像よりもひどいものでした。

盗難は日常茶飯事。そのためカバンには常に目を配らなければいけない。スマートフォンは街中で出すことはできない。みんな少しでもお金がほしい。そのため買い物のお会計でのおつりは言わなければ返ってこない。日本で当たり前にしていたことがフィリピンでは危険でした。フィリピンの現状が生み出した危険を学ぶことができました。

3つ目は、支えです。支えはこのフィリピン派遣研修で一番強く感じることができたものです。福島から成田に行くまで、成田から福島に帰るまで送ってくださったバスの運転手の方。成田からフィリピンに行くまで、フィリピンから成田に帰るまで、飛行機の乗り降りを誘導してくださった空港の方。

フィリピンでの移動のバスの運転手の方。

フィリピンでたくさんたくさん交流してくださったフィリピンの赤十字の方。

フィリピンでの私たちを一番サポートしてくださったリンさん。

福島からフィリピンでの活動を全サポートしてくださいました引率の先生方。不安、楽しみ、疲れ、全てを分かち合えた同じ研修メンバー5人の先輩方。

そして初めての海外行きを応援し、送り出してくれた母。

私が、今、この報告書を書くことができるまでに数えきれない程の方々の支えがありました。私一人では決して終えることができなかった派遣研修はたくさんの支えのおかげで素晴らしいものになりました。

支えを感じ学んだことは感謝です。支えてくださったすべての方への感謝。

その支えを素直に受け取り、研修を頑張ることができた自分自身に感謝です。

私は今回のフィリピン派遣に応募して、本当に心からよかったです。

フィリピンでの全てが、私の大切な思い出になりました。



特攻隊・原発・リサイクル～伝えるということ～

福島県立白河実業高等学校 青少年赤十字顧問 金澤直人

§ 0 緒言

今回のフィリピン派遣は引率教員として参加しました。が、個人的には交流というよりも、現地に赴き肌感覚でフィリピンについて知ることが何よりも楽しみでした。特に、職業柄ではありますが、バターン原発をはじめとした、フィリピンのエネルギー・資源問題について理解を深めることができれば、と派遣前までは大雑把に考えていました。しかし現地では、想像をはるかに超えた学びや思索のきっかけを得ることができました。

§ 1 フィリピンと神風特攻隊

本研修のおよそ2週間前、友人が主宰している社会人劇団の鹿児島公演に同行してきました。もちろん、目的は公演のお手伝いです。そのお芝居のタイトルは『月光の夏』。簡単に説明すると、特攻前夜に小学校を訪れてショパンの「月光」を弾いた若者を巡るお話です（原作が書籍や絵本で出版されています）。合わせて、お芝居を深めるためのスタディーツアーも兼ねた旅公演です。鹿屋航空基地史料館や知覧特攻平和会館の見学、鹿屋市に残る戦争遺産の見学、特攻の母と呼ばれ慕われていた鳥濱トメさんが営んでいた富屋旅館への宿泊と講話など、盛りだくさんの2泊3日でした。



史料館や平和会館には、神風特攻隊員が残した遺書や遺影がたくさん展示されていました。特攻隊員が最期に超えていった開聞岳を見てきました。特攻隊員が富屋食堂で食べた最期の食事をいただきました。特攻に失敗し、生きて戻ってきた隊員が隔離された「振武寮」のシーンが強烈なお芝居でした。



このスタディーツアーを通して、考えさせられたことがあります。よく日本人の精神構造として、いい意味でも悪い意味でも例えられることの多い特攻隊。しかし、はたして私たちは、特攻隊についてどこまで知っているのだろうか、と。少なくとも私は、ほとんど知りませんでした。

いわゆる「神風特別攻撃隊」。これは、海軍による航空特攻隊の総称です。しかし、当時の日本には空軍がなく、陸軍と海軍が別に航空隊が編成されており、陸軍も海軍と同様の特攻作戦を行っていました。そして、はじめて特攻作戦が行われたのが、1944年10月のフィリピン戦線だったのです。このことを、私は鹿児島公演後からフィリピンに出発するまでの間に、学んだことのひとつです。

フィリピンでは、第二次世界大戦中における日本とフィリピンの関係が、丁寧に石版レリーフに記録されていました。加えて、サマット山の戦争

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

記念館に日本側の史料が残されていることに驚きを隠せませんでした。学びとは、文献をたどるばかりではなく、記録が展示されている場所に足を運ぶことなのだな、と身をもって体験できた瞬間でした。

さらに、同行してくれたフィリピンのユースメンバーが、私たちに説明をしてくれました。どう考へても、彼らより私の方が年上です。逆の立場になったとき、はたして彼らのように説明できるだろうか。こんなことを考えると、恥ずかしさがこみ上げてきます。自分自身の今後の生き方を変える、大きなきっかけの一つでした。

§ 2 フィリピンと原子力発電所

フィリピンのバタアン半島には、原子力発電所があります。しかし、切尔ノブイリの原子力発電所事故を受けての市民運動および原発反対運動による非稼動決定の大統領令を受けて、一度も核燃料が投入されていない唯一の原子力発電所です。本来ならば、施設見学もできるはずだったのですが、担当者の不在かつ停電の影響で、1階部分だけの見学で終わってしまったのが、非常に残念でした。

ところで、この原子力発電は「加圧水型」軽水炉による発電設備です。原子力発電は、核燃料を燃やして蒸気を作り、その蒸気によってタービン（羽根車）を回転させ、その回転エネルギーによっ

て発電機を回し、電力を得る発電方式です。そして「加圧水型」とは、タービンを回す蒸気には軽水（普通の水）を使用するため、正常運転中ならば外に放出する軽水は放射線によって汚染されない、という特徴があります。そして、この「加圧水型」軽水炉は、主に西日本や北海道で導入されており、主要メーカーは三菱重工業や東芝とアメリカのメーカーであるウェスティングハウス・エレクトリック社の連合会社が代表的であり、スリーマイル島原子力発電所事故が起きた原子炉も「加圧水型」軽水炉です。一方福島第1原子力発電所は、汚染された水（重水）による蒸気でタービンを回転させる「沸騰水型」軽水炉です。

バターン原発は、事故によって停止した発電所ではありません。一方、福島第1原発は現在も事故の収束が見えません。福島県で生活をしている人間として、原発の廃炉を最後まで見届けなくてはならない人間として、原子力発電に関する知識は教養として知っておかなくてはならないのでは、と改めて感じることができた見学でした。

§ 3 フィリピンとリサイクル

最終日には、ラス・ピニヤス地区で行われているリサイクル施設の見学をしました。訪問するまでは、私たちが知っている3R'sの施設なのだろうか、と考えていました。しかし、その認識は正直甘かったようです。

フィリピンは、自然災害、特に台風等による水害が頻繁に起こる国です。しかも、水害の度ごとに河川の氾濫が起きてしまいます。その原因の一つが、ウォーターヒヤシンスです。ヒヤシンスという名の通り、美しい花です。しかし、繁殖力がとても強く、あっという間に水面を覆い尽くし、また大量に生じる枯れ草も環境に悪影響を与えてしまうことを、派遣後に知りました。





まず、河川からウォーターヒヤシンスの茎を集めるところからはじまります。もちろん、集めてくれた人に対して報酬の支払いもあります。その茎を乾燥させ、纖維状にしたものと編み込んで製品にします。そして、纖維にならなかつたクズを粉碎し、漂白剤と混ぜることで和紙のような紙にします。さらに、紙にもならなかつたものからシトロネラオイルを抽出し、残渣を加熱して植物燃料を生産します。河川を汚す原因を取り除き、無駄なく製品化する合理的な方法だな、と感心しました。

同じように、河川の汚染原因のひとつにプラスチックゴミが挙げられます。そのゴミを有効活用する手段のひとつとして、プラスチックの成形加工による学習机の生産も行われていました。

プラスチックの代表的な成形加工のひとつに、「射出成形」があります。射出成形とは、ペレット状にしたプラスチックを溶かし、それを高い圧力で金型の中に押し込み、その後で冷やして固め



る成形方法で、金型さえ作れば同じものを大量生産できます。私たちが見慣れているプラスチック製品の大部分は、この方法で生産されます。射出成形の材料には、プラスチックのペレットが使われます。ペレットとは、円柱状の小さな粒のことです。(天然ウランと二酸化ウランを混ぜた核燃料もペレットの形状で使用します)

いわゆる一般的な射出成形と異なる点は、河川やゴミの埋め立て場から集めてきたプラスチックゴミを洗浄し粉碎したものを材料として使用している点です。そのため、工場は正直ゴミの匂いが立ち込めていました。しかし、無造作に放置されているわけではなく、仕掛けとしてのプラスチックゴミの山です。そこにはゴミを回収する仕事やゴミの分別をする仕事がある、ということを垣間見ることができました。



§ 4 所感～伝えるということ～

フィリピンには、第二次世界大戦の負の記憶が残されていました。また、ホテルやバターン原発で2度の停電を経験しました。さらに、ただのリサイクルではなく、河川の氾濫や汚染を解決しようとする目的でのリサイクルがありました。その上、都市部の道路の慢性的な大渋滞や、家族や信仰そして子供たちを大切にしている生活もありました。

フィリピンという国は、仕事もなく夢を叶え、

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

家族を養うために海外へ出稼ぎに出なくてはならない現実がある、ということをお聞きすることができました。そして、ダンプサイドでスカベンジャーとしてゴミを集め分別することすらも、収入のために行わなくてはならない人たちがいました。自然災害については日本でも知ることができます。しかし、フィリピン環境法によりゴミの焼却ができないことを知っている人は、日本にはいったいどれだけいるのでしょうか？

フィリピンにより多くの産業が生まれるためにまずは道路のインフラ整備と電力の安定供給が不可欠でしょう。電力の安定供給に関して言えば、もし日本にもフィリピンのようなダンプサイドがあるとすれば、そこで大量のゴミ焼却をしながら電力も貢献する廃棄物発電も一つのアイディアでしょう。しかし、ゴミ焼却が禁止されているフィリピンでは実現不可能です。火力でも原子力でもない大規模な発電所の建設、もしくは小規模分散型発電（エネルギーの地産地消）としての小水力発電などが必要なのかも知れません。しかし、小水力発電を実現するためには、水害に強いコミュニティ作りや河川の整備が必要です。しかし、河川の整備には時間がかかります。としたときに、政府に頼るだけではなく、草の根的な運動としてウォータヒヤシスの駆除やゴミの回収も必要なことです。これらを仕事として営む人たちの衛生



2018/08/17

環境の充実、そこに新しい仕事の芽生えがあるかもしれません。

こんなことを、私は派遣後に考えるようになりました。正直なところ、考えなくてはならないことがたくさんあります。ただ、一つだけいえる確かなことがあります。それは、「関心を持つ」ということ。関心さえあれば、日本でも必要な情報は得ることができます。関心がないければ、必要な情報も得ることができません。加えて、得た情報を「積極的に伝える」こと。

フィリピンの場合は、伝えたくても毎日の生活で精一杯です。だとしたら、余裕のある私たちが、情報を汲み取り、代わって発信することも必要かもしれません。さらに、自分たちを省みたときに、第二次世界大戦のこと・東日本大震災のこと・原子力発電のこと・原子力災害のこと、これらのことについて発信できるようになる責務があると考えます。そのためには、無関心ではなく、関心を持ち続けること。

これが本研修で私が心に刻んだことです。さらに、「無関心」は、人道の敵でもあります。私自身の中にも人道の敵がいたということを、反省することができました。

このようなよい機会に関わることができ、私は感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

フィリピン派遣に参加して

福島県立平支援学校 JRC顧問 八 島 梓

私達、青少年赤十字フィリピン派遣団10名は、8月12日（日）～8月18日（土）までの7日間の日程でフィリピンでの研修を実施した。生徒6名、教員2名、日本赤十字社福島県支部のスタッフ2名というメンバーでの参加であった。今回の派遣事業に参加するにあたり私は、「フィリピンの赤十字について」「学校訪問、交流」「フィリピンの社会情勢（暮らし、教育）」という三つの事を中心に学んできたいと考えていた。7日間の研修では、いろいろな地区や施設を訪問し、様々な事を体験する事ができたが、今回は、この3つの事について報告したいと思う。

【赤十字本社訪問について】

2日目に訪問した赤十字の本社では、前日の台風の対応に追われていた。台風により、多くの地区が被害にあっていてそちらの方へ出向いているとの事だった。本社では、赤十字の活動についての話を聞き、オペレーションセンターや血液センターの見学をした。オペレーションセンターでは、災害状況の把握や災害を最小限に抑えるためにどうするか、支援をどうするのかを指示する活動を行っていた。また、台風による水害の多いフィリピンでは、自分達で支援しあえるように、地域の住民が常に意識を高く持っているという話も聞いた。災害にあった時には、お互いに助け合うという意識の高さに感心した。日本では、災害が起った時に助け合うという考えを持っている人はどのくらいいるのだろうか。最近になり、自然災害の恐しさを感じている日本人にとってフィリピンの方の防災に対する意識を見習いたいと感じた。今回出会ったフィリピン赤十字のユースメン



バーやスタッフは皆、「ボランタリー精神」や「先見」をもって活動に取り組んでいた。それは、日本人の赤十字のメンバーも一緒だと思う。「活動の内容」や「思い」は国籍が違っても同じなのだと気づくと同時に、それが嬉しく思えた。本社では生徒6人が、日本や福島、JRCの活動の紹介についてPowerPointを使って発表したり、1円玉募金を贈呈したりした。出発前に日本でのJRCの活動や日本の良い所を紹介するスライドを作成し、それを紹介する原稿を英語で作り、堂々と発表する事ができていた。その発表をみて、フィリピンの本社の方からも感嘆の声を聞く事ができた。少ない時間の中でみんなで協力しながら練習や準備をして、他国でそれらを発表する生徒の姿をみて、生徒たちのやる気や伝えたい思いを感じ、感動した。

【学校訪問、交流について】

今回、二つの高校と、一つの大学を訪問し、現地の高校生やユースメンバーと交流した。どの学校でも熱烈な歓迎をうけ、フィリピンの伝統的なダンスや歌等を見たり聞いたりする事ができた。学校交流を通して日本との違いを感じた事は、ま

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

ず、フィリピンの児童生徒の物おじしない人なつっこさである。フィリピンの児童生徒や、ユースメンバーが私達派遣団を見て「一緒に写真をとろう」「サインして」等すぐにフレンドリーに話かけてくる姿が印象的だった。初めは日本人メンバーも恥ずかしがっていたが、3日目あたりから少しずつその対応に慣れてきた様子だった。私たち派遣団も、「出し物」を準備していった。「よさこい」等のダンスや音楽に合わせて文字を書く「書道パフォーマンス」といった日本の伝統を披露してきた。初めて披露した時、生徒達は、段取りが分からず、何をどうしてよいのかと戸惑う姿があった。教員の指示に従うだけだったり準備や片付けもどうすればよいのか分からぬ様子だった。しかし、回数を重ねるにつれ、自分達で段取りを考えて意見を言い合い、自分達で準備をするようになった。その姿には、「気づき、考え、実行する」という精神や成長がみられ、私の7日間の引率の中で一番感動した場面であった。異国の地であっても、次にどうすればよいのか自分で考え行動する事の出来るようになった生徒達にとって、このフィリピン派遣という経験は大きなものになったのではないだろうか。



【フィリピンの社会情勢に触れて】

今回フィリピンを訪れて感じた事の一つに「貧富の差」がある。ガイドのリンさんの話にもあつ

たが、富裕層と貧困層の生活水準の違いがとても大きかった。それらの差を感じたのは、パヤタス地区に訪問した時だった。私達が泊まっていたマニラのホテルの周りには、大きな家が建ち並び、大きなショッピングモールがあつたり、道路が整備されており東京よりも都会だと感じてしまう程であった。しかし、そこから20kmほど離れたパヤタス地区には、ゴミを拾って生活をしている人々が暮らすといった現状がある。私達は今回、日本人が活動している非営利活動法人ソルト・パヤタスのスタディツアーパーに参加した。そこでは、2000年におきたゴミ山崩落事故で多くの人々が生き埋めになってしまった事や現在その地区で暮らす人々について、ソルト・パヤタスが行っている子どもへの教育支援事業について、女性への支援事業についての話を聞いたり、実際にその場所に訪れたりした。私は、この地区の4畳程のスペースに5人が生活している家を訪問した。屋根はトタンで覆われており、父親は地面で寝ていた。その家族の娘は、ソルト・パヤタスの団体の支援を受けながら学校へ通っている。また、ソルト・パヤタスの団体は、ごみ拾いに代わる収入源をみつけ、生活を少しでも安定・向上させたいと願う女性を対象に、クロスステッチ製品の製作、販売を通して、収入の機会を創る活動も行っている。そこでは、クロスステッチのかわいいコースターが販売されていた。私は、日本人の団体がこのような活動を行っている事を初めて知った。パヤタス地区への訪問の際には、その地区の子ども達が通う学校についても話を聞く事ができた。その地区的学校は、生徒数が多いため、2部制で授業を行っている事や生徒数に対し、教員の数が足りないという話を聞いた。教育が受けられる環境ではあるが、家庭の事情から学校をやめて働いたり出生届けが出されておらずに教育が受けられない

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

現状がある事も知る事ができた。教育という視点で学校や教育について話を聞く機会ができたが、その話を聞く事により、日本の教育水準の高さを知る事ができた。「どこにいても同じ教育を受ける事ができる幸せ」について改めて考えさせられるとともに、日本の子供たちにその事を伝えていく事も、今回参加した私の役目であると感じた。ガイドのリンさんが「なぜ、フィリピンの貧困の現状を高校生に見せるとと思いますか?」という質問をした。答えに詰まった私をみて「将来の日本の子供たちをこのようにしないためです。」といったリンさんの表情が忘れられません。この言葉を聞いて私は、「日本の若者は、今の現状に満



パヤタス地区の小学校



パヤタス地区の家

足してはいけない。世界にはこのような地域もあるのだから。」という事を言いたいのだと思った。今回、参加した生徒の中には、「パヤタス地区の家族と写真を撮る時に笑顔になってよいのか迷いました。」と言う生徒がいた。「百聞は一見にしかず。」今回まさしくこの言葉を体感した。生徒達は、発展途上国のことについては頭の中では理解していたと思うが、今回体験したこの現状をどのように感じ考えているのだろうか。私は、生徒達が将来、リンさんが言ったように「このような貧困の子供たちのいる地域」が一日でも早く「どこにいても同じ教育が受けられる」世界を作る一員になってほしいと願っている。

7日間の派遣を通して、フィリピンという国の現状、そこから見えてくる発展途上国の厳しさについて学ぶ事ができた。同時に、フィリピンの方々のおおらかさや優しさにも触れる事ができた。国が違っていても変わらない事、国が違うから分かる事、今回派遣に参加した上で様々な事に気づく事ができた。しかし、国籍は違っていても、将来の夢を持って今を強く生きる若者の姿は、一緒なのだと感じる7日間であった。出会ったユースメンバーの中に「将来、日本に行って働きたい」という生徒がいた。その生徒が日本に来るときに、誇れる日本であってほしい。また、生徒達が7日間という短い期間の中で「気づき、考え、実行する」事ができた事に生徒達の成長と生徒一人一人の顔に自信という表情が出てきたと感じた。今回の経験が将来生徒達の生きていく糧になる事を期待している。

フィリピン派遣に参加して

日本赤十字社福島県支部 事業推進課参事 岩崎睦子

東日本大震災の復興支援事業の一つとして、青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」が実施されるにあたり、支部職員として8月12日から19日の8日間参加させていただいた。

「フィリピン派遣」の目的として、現地のJRCメンバーとの交流による国際理解・親善があげられる。参加する高校生は限られた時間の中で事前研修からそれぞれ準備を進めていた。私達職員も無事に楽しく交流ができるように、また安全に過ごせるように準備を行った。

今回の派遣では、フィリピン赤十字社や支部訪問、学校訪問での交流会、ソルト・パヤタスのスタディーツアー、サマット山戦争資料館見学などたくさんのプログラムが組まれていた。私自身も初めてのものばかりで、学ぶべきことが多くあり貴重な体験をさせていただいた。その中で、特に印象に残ったことを報告する。

派遣初日は、福島からフィリピンまでの移動だけだったが、ホテルに到着したのは23時を過ぎており、翌日の打ち合わせを行いそれぞれ就寝した。

2日目の最初に訪れたのは、フィリピン赤十字本社だったが、前日の大雨による洪水があり赤十字職員やボランティアの方々は対応に追われている状況だった。そのような中でも、私たちの訪問を笑顔で迎えてくれて、フィリピン赤十字の活動の報告や今まさに災害の対応を行っている司令室の見学、血液センターの見学、緊急車両の見学やスタッフによるデモンストレーションなどとても丁寧に説明してくれた。洪水の影響で当日予定していた支部訪問、学校訪問も中止となつたため、午後まで私達は本社の見学をさせてもらった。

翌日からは休校が心配されていたが、学校訪問や支部訪問ができることになった。今回の派遣では、ケソン支部、バタアン支部ラスピニヤス副支部を訪問し、赤十字職員やボランティアの方々、交流を深めた。また、学校訪問ではセント・サンタルチア高校、バタアン公立高校、ベニンスラ大学を訪問し各校の児童や学生との交流を行うことができた。訪問先では、どこも温かく迎えてくれたが、最初に訪問したセント・サンタルチア高校では、多くの児童や学生が外に出て迎えてくれて、たくさんの歌やダンス、フィリピンの歴史を表現した踊りなど熱烈な歓迎に圧倒された。訪問した学校は、どの学校も工夫を凝らしたダンスや伝統的なダンス、力強いバンブーダンスなど楽しく心温まる歓迎をしてくれた。派遣メンバーも福島県の現状を報告し感謝を伝えたり、よさこい、ダンス、書道パフォーマンスを行った。訪問当初は緊張していたが、次第に自分達でどんなふうに表現するのか、どうしたら楽しんでもらえるのか、考え方意見を出し合いながら、日に日に堂々と表現していく姿に本当に感動させられた。

フィリピンの貧富の差があることは派遣前から知っていたが、現地に行ってみると想像を超えていた。メトロマニラの中心街には高層ビルが建ち並び高級ブランド店あり高級住宅街も続いている。しかし、郊外へ出るとトタン屋根の粗末な建物が並んでいる。特に印象的だったのが、ケソン市パヤタス地区への訪問だった。バスから降りると悪臭がして、道路には動物の糞があり人々が密集していた。そこで暮らす人々は主にマニラ市から収集されてできたごみの山の中から再生できるものを探し、それを売って生活している。2000

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

年7月には台風の影響で高さ30m幅100mに渡り、ごみの山が崩落し500軒の家が下敷きになり200人以上の方が犠牲となっていた。崩落したごみの山の前には慰霊碑が建てられていた。しかし、ごみの焼却がされないフィリピンでは、ごみの投棄がなくなったのではなく、別のところにごみの山ができて同じようにごみの山で生計を立てている。

現地で活動している特定非営利活動法人ソルト・パヤタスのスタッフの方々に案内してもらい、足元は雨の影響でぬかるみ家々の狭い間をとおり、一軒のお宅を訪問することができた。その家は、狭く薄暗い小さな家にお母さんと2人の小さな子どもたちがいた。小さな電球だったが、料金を払って親戚の家から電線を引いていた。家には女の子のランドセルがあり、学校は楽しいと答えてくれた。そこで暮らすお母さんや子供たちは、貧しく食事もきちんととれない生活だが優しい笑顔で話してくれた。

パヤタス地区の中を歩いているとたくさんの子供たちが遊んでいる。学校はどうしているのか聞くと、子ども多いため全員が一緒に学校に通うことはできず、1日のうちに、通学時間を午前と午後に分けていた。午前中の児童は授業が6時に始まり昼には終了し、また別の児童の授業が午後から始まり夜まで行っているとの説明だった。

パヤタス地区を訪問して、フィリピンの貧富の差を感じ、厳しい生活環境の中で暮らしている方を実際に目の当たりにして、派遣メンバーも日本の生活環境との違いに、たくさんのことを感じたと思う。普段の生活が当たり前のことだと思っていたが、とても恵まれている生活であることを強く感じた。

支部の訪問や学校訪問の他にもサマット山の戦争資料館やゼロポイントの見学も行った。サマッ

ト山の山頂には、第二次世界大戦で日本軍・アメリカ軍・フィリピン軍の戦いで多くの犠牲者がでたことの慰霊のために高さ95mの大きな十字架が掲げられている。資料館には、兵器



や遺品、写真が展示されていた。戦争の悲惨さや日本兵の残酷さを感じるものが多く胸が痛んだ。

この日の行動は、前日交流会を行ったユースメンバーと共に見学を行った。私自身はこんなにも詳しく歴史を説明することができないが、ユースメンバー達は派遣メンバーにそれぞれ付き添い丁寧に説明してくれていた。派遣メンバーも自分からコミュニケーションをとり積極的に会話していくことに感心させられた。

フィリピンでの日程を終えて帰国当日の朝、マニラ空港で前日の事故の影響で航空機のダイヤの乱れがあり出発時間が大幅に遅れていることを知った。ガイドの方から、今空港に行っても混乱して待つ時間が長くなるだけ、昼ごろホテルを出発すると予定が変更され、それまで私はホテルで日本と連絡をとりながら待つことになった。マニラ空港に到着すると大勢の人で混乱していて、私たちが空港に到着し搭乗手続きを行い飛行機に搭乗できるまで6時間以上が経っていた。日本へは深夜に到着するため、成田にもう1泊し予定より1日遅くなったが、無事に福島へ戻りすべての日程を終了した。

フィリピン派遣の日程は過密で、派遣メンバー

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

は朝早くホテルを出発し、ホテルに戻ってきてからも「振り返り」を行い、翌日の訪問のための準備や練習を行っていた。初めは緊張している様子だったが、いろいろな方と出会い交流していくうちに笑顔で会話している姿に変化していった。また、毎日の「振り返り」で話されることは、翌日には行動にうつしメンバー全員が気づき、考え、実行するという8日間を過ごしたことは、メンバーの大きな自信になると思う。そして、たくさんの学びと実際に現地を訪ねたからこそ知ったこと、感じたこと多く、派遣メンバーの貴重な体験

となり大きく成長できたと思う。また今後の生き方考え方にも影響を与えるものになったと感じる。私も今回の随行を通してフィリピン赤十字社の職員やボランティアの活動を知ることができた。そして、何よりいつでも笑顔で温かく接してくれることに私も緊張がほぐれフィリピンの方々の心の豊かさを感じることができた。

最後に、引率していただいた金澤直人先生、八島梓先生には帰国時のアクシデントにも対応いただき、お二人のお力添えにより無事に全行程を終了することができました。心より感謝申し上げます。



フィリピンを訪問して

日本赤十字社福島県支部 総務係長 松本琢也

「J-SPEEDで報告してください」北海道胆振東部地震の厚真町現地本部で、救護班に指示が飛びます。J-SPEEDとは、災害医療時の標準診療日報で、医療チームの力を生かすため、2016年の熊本地震から本格的に取り入れられました。このシステムについて調べてみると、フィリピン国保健省とWHOが共同開発したSPEED(Surveillance in Post Extreme Emergencies and Disasters)をモデルにした日本改良版ということがわかりました。

フィリピンも火山噴火など災害が多い国です。そして訪問した8月は台風シーズン。フィリピン赤十字本社の若いスタッフが、たくさんのパソコンとモニターを駆使して、大雨災害のオペレーションをしていたことが思い出されました。

首都のマニラだけではなく、地方であるバタアン支部のスタッフやユースボランティアも皆、スマートフォンで記念撮影をしたり、音楽を聴いたりしていました。フィリピンは私の想像以上に

ITが進んでいました。

そのバタアン支部のユースボランティアが、見学先に多数同行してくれました。みんな明るい笑顔で会話が弾み、道中はとてもにぎやか。(英語が苦手な私は、残念ながら??の連続でした。)

サマット山の「戦争記念館」では、ユースの皆さんのが第二次世界大戦の歴史を詳しく説明してくれました。その後「ゼロポイント」を訪問。ここは日本軍が、フィリピンや連合国を捕虜に対し、過酷な行軍を科した起点です。改めて、戦争の重い歴史を感じずにはいられませんでした。



フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

また、若いユースの皆さんが、長い年月を経た戦争の歴史に造詣が深いことに感心させられました。赤十字の役割の一つに「ジュネーブ諸条約の普及」があります。紛争時の捕虜の扱いなど人道に関わるとても重要なテーマなのですが、イメージがわからず、説明しにくいテーマと感じていました。しかし、今回の訪問で、歴史を学ぶことがその理解を深めることにつながるのではないかと思いました。

そして、ユースの皆さんが、いわば加害者側である私たち日本人に、特に非難するでもなく、友好的に接してくれたことに、安心し、感謝もしました。従軍慰安婦や徴兵工などの諸問題が、今も国家や民族の摩擦となっています。しかし、フィリピンは親目的です。訪問先の学校も、私たちを「熱烈歓迎」してくれました。フィリピンの歌や踊りはもちろんのこと、日本の歌も一生懸命に披露してくれました。

親日の背景には、円借款などによる戦後の支援もプラスに作用しているでしょうし、若い世代にとってはアニメなどが日本に親近感を抱かせているようです。しかし、今回の訪問で、フィリピンの皆さんのが、人を組織の一員として見るのはなく、人を個人として捉え接することが大きな要因なのではないかと感じました。お世話になったガイドのリンさんや赤十字スタッフとのやり取りのなかで、組織は組織、あなたはあなた、と捉えているのだと感じられることが多々ありました。また、フィリピンのさんは、基本的に親和性が高いのではないかとも思いました。

フィリピンを離れる最終日、マニラ空港でのオーバーラン事故の影響で、予定は大幅に変更となりました。空港ロビーは長蛇の列。搭乗手続きにも長時間を要しました。こうした場面でも、福島の高校生メンバーは力を合わせて対応してくれました。今回の訪問は、天候の影響などによる突発的な予定変更、連日深夜までの打合せや練習など、メンバーの皆さんには大変な日程だったと思います。成田空港を出発する時にはまだ硬さも見られましたが、訪問先の状況に合わせて発表の方針を工夫するなど、「気づき」「考え」「実行する」が実践され、日に日にチームワークもよくなり、個々の力も發揮されていきました。

この長いようで短い8日間は、「安全な引率」、「東日本大震災の支援への感謝の意を伝える」を自分のなかのテーマとして参加した私にとって、異文化に触れるとても貴重な経験となりました。金澤先生や八島先生、岩崎参事、6名の高校生メンバーの皆さん、支部の皆さんにも助けていただき、無事に研修を終えることができました。ありがとうございました。



『貧困状態について』

学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校 3年 佐 藤 涼 香

私が、貧困について調べようと思ったのは、将来自分が管理栄養士を目指す上で日本の環境状態だけで無く他の貧困問題に目を向けることにより、幅広く活躍出来ると考えたからです。そして、日本では当たり前のことが当たり前ではないことがあることに気づくこともできた。

私達が泊まったマニラ首都圏の中心部にあるホテル付近は、高層ビルやホテル、デパートなどが密集して、ブランドの巨大看板などもあった。フィリピンは思ったよりも発展しているのではないかと感じたが、中心部からだんだん離れてくると、トタン屋根で作られた家や、ボロボロの服を着ている人など極端な貧富の差が見られた。

フィリピン派遣の3日目に訪れたソルト・パヤタスでは、貧富の差を肌で感じる機会となった。ゴミ山の中に入ることは出来なかったが、ゴミ山の周辺まで行くとその規模は想像を超えて大きく全く異なるものだった。

今から18年前の2000年7月10日に起きたゴミ山崩壊事故の犠牲者の方々の名前が刻まれていた。想像するだけで悲惨な事故だったんだなと実感することができた。また、家庭訪問した。私が訪問した家庭は、4人のお子さんを母親一人で育てている母子家庭だった。母親は生計を立てるために1日中仕事をしていると話をきいた。そのため、家事やご飯は、子どもたちが一人一人分担してやっていると聞いた。お子さんは一番下の子が5歳で上の子が11歳だった。小さい頃から一生懸命家事や料理をしていることに感心した。もし、自分が小学生のころから一人で何もかもやることになっていたら、泣いたりすぐ諦めないとおもった。そう思うと子どもたちは素晴らしいと思った。

たとえそれが、生きていくために仕方なくやっていたとしても。また、ママエンパワメント事業も見学をした。そこでは、ゴミ山が閉鎖され、ゴミ拾いで収入を得ていた現地の女性のために、クロスステッチ製品の製作・販売を行うLihkaという就労場所を提供している。安全な仕事で収入を得るだけで無く、技術を習得し、様々な能力や人間性を向上させる目的も果たしている。

パヤタス地区で、不安定な収入でかつ危険な仕事であるスカベンジャーとして働く人は約2,000人いるが、団体が行っている活動は、パヤタス地区の貧困をなくすきっかけになると思う。奨学金によって学校に行ける子どもたちが増え、安定した職に就き、十分な収入を得れば、生まれた自分の子どもを学校に通わせることができる。それは貧困の負の連鎖を断ち切ることにつながると思う。

今回のフィリピン派遣で、自分の目でゴミ問題や貧富の差など、貧困問題に目の当たりにし、世界の問題に目を向けることで、日本では当たり前のことが世界では当たり前ではないことがわかった。私自身の世界観が広がったように感じた。貧困から抜け出し、人々が安定した暮らしができる



ゴミ山崩壊事故の慰靈碑

自由研究

ようになるには、より多くの人が貧困問題に向き合い、活動することが必要である。そのためには、フィリピン派遣に参加した私達が、フィリピンの

現状を伝え、世界の問題に興味を持つてもらえるようにすることが大切である。



貧困地域の実態

学校法人松韻学園福島高等学校 2年 原 大河

はじめに

フィリピンに行く前、顧問の先生からフィリピンの貧困地域のお話を聞いたり、映像を見せてもらったりした。その映像には、ゴミの山からゴミを拾っている子どもの様子が映っていた。まず、ゴミが積み上げられて山が出来ていることに驚いた。そして、その山からゴミを拾って生活している子どもがいるということを知り、衝撃を受けた。僕が抱いていたセブ島などの南国の観光地であるイメージのフィリピンとは大きく違っていたのだ。そこで、なぜ国内でこんなにも格差があるのか不思議に思い、貧困地域の現状について調べたいと思った。

「子どもたちの笑顔」

貧困地区のパヤタスに到着し、バスを降りた瞬間から異質なにおいがした。正直、呼吸をするのが辛いくらいの臭さであった。道路には、笑顔で楽しそうに遊んでいる子どもがたくさんいて、思っていた雰囲気とは少し違っていた。今の日本にはない光景であった。名前を聞いてきたたり、どこの人なのかを聞いてきたりする子どももいた。僕は話しかけてきた子どもたちに対していくつか質問をして、子どもたちは笑顔で答えてくれた。その結果が以下のようになる。

Q. 今、一番やりたいことはなにか。

A. 勉強したい。学校に行きたい。

Q. 今、一番欲しいものはなにか。

A. 親の手伝いのためにホースが欲しい。

Q. 将来の夢はなにか。

A. 先生。警察官。医者。

Q. 今は楽しいのか。

A. 楽しい。幸せ。

どれも意外な回答で驚いた。将来の夢が人の役に立ったり、人を助けたりするもので、正義感が強いと思い、感動した。同じ質問を日本人にしたら、どう答えるのだろうか。勉強嫌い、面倒臭いと感じていた僕にとって、心に響く子どもたちの言葉だった。ちなみにパヤタスで全く学校に通えていない子どもは約2%。また、小学校高学年から前期中等教育にかけて中退者が急増している。この問題解決には何が必要になるのだろうか考えさせられた。

「気になっていたゴミ山」

フィリピンでは、ゴミを焼却処分することは有害物質を発生させるため禁止している。そのため、特定の場所に埋め立てる形でゴミを処理している。そうして、次々に積み上げられ山となつたのがパヤタスにあるのだ。以前に映像で見たことはあったのだが、実際に生で見てみると、あまりの大きさ、高さ、広さに目を奪われた。そんなゴ

自由研究



焼却されないゴミ

ミ山が崩落した事故のことは、この日のお話で初めて知った。2000年7月10日、前日から降り続いた台風の影響を受け、ゴミ山が崩落し、約1,000人の人が犠牲になったそうだ。この事故が世界的に広まり、パヤタスがフィリピンの貧困の象徴として知られるようになり、諸外国からの支援が増加した。それに対し、フィリピン人の間ではパヤタス=不潔で悪臭がし、病気持ちであるといった認識、差別が強まった。そして、パヤタスA地区にある中学校では2007年度から、一目でパヤタス出身であると分からないように学校名からパヤタスの文字を外した。このことを聞いた時、外国が支援してくれているのだから、国内も協力して助け合えばと思ったが、そうはいかないのかと悲しい気持ちになった。

「家庭訪問」

パヤタス地区を支援するNPO団体ソルトパヤタスの案内で、実際に家庭を訪問することができた。僕が訪問した家庭は、父親、母親、子ども3

人の構成であった。父親は工事関係の仕事を他の地区で行い1日約800円を稼いでいるそうだ。母親は仕事の内容は忘れてしまったが、1日約600円を稼いでいるそうだ。子ども3人のうち2人は小学生で、もう1人は2歳くらいの小さな子だった。訪問した時、家の中にいたのは母親と小さな子だけだった。父親は働きに、子どもは遊びに出かけていた。この家族は月1,000円でおよそ2畳の部屋を借りて暮らしている。5人で生活するのには狭くて、不自由だろうなと思った。この状況について知った時に、いかに今の自分の生活が幸せなのか実感した。今回の訪問では、質問させていただける時間があったので、母親にいろいろなことを聞いてみた。その結果が以下のようになる。

Q. 幸せを感じる時はいつか。

A. 小さい頃の夢が先生だったのであって、子どもに勉強を教えていた時。

Q. 今の夢はなにか。

A. 自分自身がこうなりたいものではなく、子どもが小学校から大学まで無事卒業してくれるここと。職業は子どもがやりたいもので良い。

Q. 裕福な人たちはどう見えて、何を思っているのか。

A. 別に助けて欲しいというものはなく、どうも思っていない。



ソルトパヤタス家庭訪問

どの回答もいろいろ考えさせられるものだっ

自由研究

た。子どものことが大好きで本当に大切にしているのだろうなと思った。また、裕福な人たちをどうも思っていないと聞いた時は、憎たらしく思うと言われた方が気持ち的に良かった。自分たちが頼りにされていなく、無力さを実感させられたからだ。

「LIKHA」

今回お世話になったソルトパヤタスは、地域の女性、主に母親たちに生活収入を得てもらうこと、技術や自身を持ってもらうことを目的に刺繡商品の生産、販売の職を提供するLIKHAという支援活動をしている。こういった活動がパヤタスの貧困問題解決に繋がっていくと感じた。今回、実際にLIKHAの商品が販売しているところに行くことができた。タオル、マグネット、財布、バッグ、ブックカバーなど様々なものが売られていた。僕は、少しの力になればと思い、財布を購入し

た。将来、パヤタスが刺繡商品で有名な地域になることを強く願っている。

まとめ

実際に貧困地域を見ることができ、とても貴重な機会であった。日本でのあたりまえは外国ではあたりまえではないことを実感することができた。自分たちの環境がいかに恵まれているのか、幸せなのか考えさせられた。パヤタスが貧困から抜け出すには、パヤタスの人たちの抜け出そうとする強い気持ちが必要であると思った。ソルトパヤタスの人のお話によると、パヤタスの人たちは自分のことを貧困で仕方ないのだ、別に貧困のままで良い、などと思っているそうだ。そのままでは一向に抜け出せるとは思わない。しかし、そういう考えになつても仕方ないとも思う。そのため、パヤタスを見てきた僕たちが貧困地域の現状を一人でも多くの人に伝え、興味を持たせることが大切である。



貧困問題と差別に関する一考察

福島県立郡山北工業高等学校 3年 齋藤 優真

〈はじめに〉

「フィリピンは貧困問題を抱える国である」これは研修が始まる前から知っていたことであり、研修の中で最も印象深く感じることの一つでした。「貧困問題」という言葉をテレビやラジオ、SNSなどで稀に聞きますが、日本では現実味が薄く、深く考えずに聞き流してきました。日本は先進国です。故にホームレスはいるものの全国で約6,000人前後、パーセンテージでいえば人口の1%にもとどきません。対してフィリピンの貧困割合は60%を越え、多くの人々が貧困に苦しんでいます。

私は貧困問題を取り上げ考えだした頃、率直に

感想を言うのであれば「不思議」でした。「どうしてそんなにも貧困に苦しみ、なぜそこから脱却しようとする意識が希薄なのだろう」と。

お金がないなら働けばいい。と私は安易に考えていましたが、実際にはそれを妨げる大きな問題点が3つ存在しました。それは、

1. 教育環境が整っていないこと
2. 貧困に対する脱却意識が薄いこと
3. 他の地区からの地区差別があること

です。この3つの点について考察しました。

自由研究

〈教育環境が整っていないこと〉

私たちが研修の一環で訪れた貧困地区ソルトパヤタスでは7,000人の子ども達がひとつの学校に通っています。人数がとても多いために午前の部、午後の部とあり日本のように午前から午後まで授業を受けることができません。結果として一年のうちに勉強する時間が日本と比べ短くなります。

日本の小学生は基本的に一日あたり50分×6コマですが、フィリピンの小学校は午前6時から学校がはじまり50分×5コマ程度が平均です。一年間で見ればおおよそ150～200時間学ぶ時間が短いのです。

一クラスあたりの人数は40～50人と日本に比べかなり多く、先生方も全員の把握がうまくできず、全員が授業の内容を把握したかどうか分からぬという問題もあるようです。

また、フィリピンは熱帯に属していますが、貧困地区の学校では日中30℃超える上に、40～50人が教室の中に詰め込まれ、蒸し暑さでとても苦しい中、勉強しています。

フィリピンの学校は制服を着て登校するのが一般的ですが、その制服はおおよそ800ペソ（日本円にして1600円）ほどかかります。私たち日本人からしてみればたいした金額ではないと感じますが、フィリピンの貧困地区の平均月収は日本円にして2万円以下のため、かなり生活を左右する金額となっています。

学習に必要不可欠である教科書類は「購入」ではなく、学校から「借りて」学習しているため一年のカリキュラムが終わると学校に返却します。さらに、日本のように教科書がどんどん更新されていく訳ではなく、何年かに一度しか更新されません。そのため、中にはぼろぼろで中の文字が読めない教科書を使っている子どもをいるようです。



ソルトパヤタス “LIKHA”
女性の自立を目的に、刺繍商品の生産・販売を行っている。

〈貧困に対する脱却意識が薄いこと〉

「貧困という現状から脱却したいという気持ちがあまりない」これはNGOソルトパヤタスでインターンをしている竹内さんから聞いた言葉です。私はこの言葉について疑問を感じ、なぜそう考えてしまうのかを考えました。

まず、国民性です。日本人は現在生活している状態から少しでもよりよい生活を求める国民性を持っています。それに対しフィリピンに住む人々は現状維持をベースにおおらかな国民性を持っています。このおおらかな国民性が、自分自身の生活環境の改善や脱却意識を薄くしているのだろうと考えます。おおらかという東南アジアによく見られる性格は、よいことの他にこういった現状で満足してしまう気持ちがあるのかもしれません。

〈他の地区からの地区差別があること〉

ソルトパヤタスには現在閉鎖していますが「ごみ山」が存在します。2000年の事故以降閉鎖し、

自由研究

現在は樹木などを生やして根っここの力を使い、二度と崩れないようにしています。このごみ山の影響でソルトパヤタスは閉鎖した今も鼻をつくような臭いがしています。ごみ山があるという影響もあると思いますが、ソルトパヤタスではかなり部落差別のようなものが行われています。この地区に生まれ、この地区で育ち、学校を卒業し大学に進学しても、自身の出身を偽っている人もいると聞きました。また、就職に関しても同様に差別され、そのために長続きしないというのです。フィリピンはそもそも貧困層が60%を占める国であるため、ソルトパヤタスだけが貧困地区ではありませんが、ごみ山という象徴があるために差別を受けています。

また、フィリピンは階級制度がある国でもあります。低級階級の人々が上位階級の人々に意見できず、上位階級の人が低級階級の人を差別するということもあります。そして階級によってなれる職業もある程度決まっていて、政治家などの何かを変えることのできる職業は低級階級の人々はなれないのです。また、かつて植民地であったことで、上の立場の人間に刃向かいたくないという感情があるようです。「意見することにらまれたくない」という気持ちもあるようで、この辺も脱

却するという感情をそぐひとつ
の理由になって
いるのかもしれません。



〈脱却方法について〉

これらの貧困問題を解決するために当事者でない私たちにできることは何かと、何が必要であり、どんな方法があるのかを考えました。

結論を言うと外国人である私たちができることは大規模に寄付を行うことだと思います。しかしながら、一般的に日本政府がフィリピンにおこなっている寄付等はフィリピン政府に流れているだけで貧困地区には届いていません。だから民間人である私たち個人が世界規模の「クラウドファンディング」で寄付を集め、現地に無償で通うことのできる民間の学校を設立することが、貧困問題の解決に繋がるのではないかと考えました。

どんなことに対しても無知であることは何もできないと同じです。しかし、知識や考えることができれば何らかの打開策やアイディアを生み出すこともできます。これからフィリピンの貧困の未来を変えていくことができるのは、貧困で生まれ育った子供たちだと私は考えます。だからこそ、学習環境が劣悪な状況から少しでも前に進むことが一番の打開策だと思います。

〈まとめ〉

私は貧困問題に対し3つの点から考察しましたが、これらの問題以外に政治的な問題や、今回の研修や調べ学習等で見えていない部分も多くあると思います。今回の研修で学んだことは、世界の貧困の実態やフィリピンのRCYの活動を知ることのほかに、貧困問題を解決するにはまだまだ知識も足りなく、何もできない自分を知るということでした。

貧困問題は世界中で頭を悩ませる問題です。世界に貧困地区があり、世界に貧しい人々がいます。フィリピンもソルトパヤタスだけでなく、ほかにも多くの貧困地区があります。今の自分にで

自由研究

きることは、そんな世界に目を向けて、これからも貧困問題について考えること。そして、この現状を多くの人々に伝えることだと思います。まだまだ知識は足りませんが、これからJRCの活動の中で学びを深め、貧困問題についてより深く知っていこうと思います。

最後になりますが、私は、今回の研修とこの研究を通し、多くのことを学び、何も知らない自分を知りました。JRCの態度目標は気づき、考え、

実行するですが、フィリピンの貧困問題については、一高校生が一人で解決できることではなく、理想を語るのは簡単でも、現実はそう簡単なものではありません。しかし、確かに一人の力は弱く小さな物ですが、私はこの貧困という現状を知る一人としてより多くの人に伝えたいと思います。

<https://synodos.jp/international/17124>



フィリピン赤十字の災害時の活動について

福島県立白河旭高等学校 3年 内 儀 雪 野

私は東日本大震災を経験して以来、災害・防災について興味をもっている。日本は地震、津波、台風、洪水など災害が多い国として世界に知られている。そして台風、洪水をはじめとして自然災害が多いフィリピンの環境は日本と共通するものがあると感じ、フィリピンと日本の災害時の赤十字の活動の違いや備えなどについて調べてみたい

と考え、自由研究のテーマに設定した。

まず災害時の赤十字の活動についてだが、フィリピン赤十字は災害に対してはマネジメント、レスポンスユニット、オペレーションセンターの3つのグループがあり、4段階でマネジメントを行っていた。

① 災害リスク軽減と管理	② 災害準備
<ul style="list-style-type: none">• オペレーターを用いた 早期警戒と早期行動 →災害の小規模緩和	<ul style="list-style-type: none">• トレーニング・研究• 緊急時の計画案作成• 供給設備の事前配置• 緊急援助資金の募金活動• レスponsツールの確保• 感染症対策
③ 災害対応	④ 災害からの回復
<ul style="list-style-type: none">• 病院／医療の提供• 救急車の手配と救急援助• 緊急救護支援• 緊急避難所の提供	<ul style="list-style-type: none">• 能力構築• 緊急シェルターツールキット配布• シェルター衛生キット配布• 衛生環境の改善• 救済資金の募金活動• 被災者の心のケア

自由研究



2018/08/13

フィリピン赤十字は本社にあるオペレーションを使ってすべての支部と連絡を取り合い、現場の状況や被災者・避難者・ボランティアの数などをパソコンですべて記録しているそうだ。また、シェルターツールキットがどのようなものか分からなかつたので調べたところ、シャベル、のこぎり、ペンチなどのセットで、これらを使ってがれきの撤去や家屋の片付けなど住宅再建のためのものだそうだ。このように、フィリピン赤十字は災害前後で計画的な対策、支援活動を行っている。このことに関しては日本赤十字の活動とあまり違いを感じなかった。

私がこの研究をする中で1番違いを感じたことは日本のJRCとフィリピンのRCY (Red Cross Youth) の活動についてだ。日本のJRCは基本的には校内の活動だが、フィリピンの7歳から30歳までのユースたちはそれぞれの地区の支部を中心に活動している。本社でフィリピン赤十字の活動の紹介や支部の中の案内をユースにもらつたときはとても驚いた。またユースたちはユースの中のインストラクターを中心にフィリピンは水害が多いためスイミングトレーニングやラバーボートの使い方など災害を想定した実践的なトレーニングを行っている。さらに、災害時の心のサポー

トや災害後に多発する感染症への対策についてもトレーニングをすると聞いてとても驚いた。日本でも避難訓練をするがどこか緊張感が欠けているように私は思う。フィリピンの若者に比べて、日本の若者は災害に対して危機管理が低いのではないだろうか。

私がこの派遣の中で1番感じたことは、フィリピンの人々は物事をみな「自分のこと」として考えているということだ。本社を訪問した際にスタッフのかたがおっしゃった「私たちは決して裕福ではない。だから助け合って生きていく。"Always FIRST, Always READY, Always THERE"」という言葉がとても印象に残った。この言葉のようにフィリピン赤十字の1,000人以上のスタッフの80%以上がボランティアで成り



自由研究

立っているそうだ。日本では考えられないことだ。自然災害によりたくさんの命が失われている現状がある。私たちは自然と共に生きていかなければならぬ。被害を最小限に抑えるために、す

べての人が災害に対してさらに危機管理を高め、助け合って生きていければと思う。そのために私自身も災害・防災についてこれからも研究し続けていきたい。



フィリピンの『交通』について

福島県立会津学鳳高等学校 3年 星 南 充

フィリピン派遣に参加することが決まり、事前学習をしていく中で、私はフィリピンの交通に関心を持った。私が興味を持ったきっかけは、フィリピンの首都マニラ市での渋滞問題を知ったことだ。現地の交通計画専門家によると「交通渋滞に伴う経済損失は一日あたり24億ペソ（日本円で約55億円）に上る。マニラ首都圏の人口は1,200万人を超え、現在も自動車の販売台数は伸び続けている」ということだ。また、マニラの地元記者も「交通渋滞が無くなれば、海外からの投資促進や雇用拡大につながり、国際競争力が高まる」と話しており、今やフィリピンの交通は経済の発展にも繋がる重要な要素であることが分かった。そこで、私はフィリピンの交通を自由研究のテーマに設定した。

まず、私が一週間フィリピンで過ごして、目にしたことと感じたこととして以下のことが挙げられる。事前研修で調べていた通り、マニラでは連日渋滞が発生した。予想していたことではあった

が、到着まで15分と聞いていた場所まで一時間近くかかったこともあり、問題の深刻さを実感した。そして、渋滞時には車線は意味をなさず車が何列にもなっており、強引に割り込むのも当たり前に行われていること、また、前後左右の車間距離が20センチメートルもなく恐怖を覚えることさえあった。現に、一週間を通して、私たちは二度車両衝突による交通事故を目撲した。研修の最初の内はこうした日本には見られない光景にただただ唖然とするばかりだったが、冷静に観察する余裕が生まれてくると、新たにいくつか気付くことがあった。例えば、信号機の少なさだ。一週間のうちに信号機を2~3機しか見つけられない、というのは日本の首都圏では考えられないことだ。このことは、渋滞の一つの原因のように思えた。また、フィリピンの方の運転技術の高さにも気付かされた。帰国後にインターネットで調べて知ったことだが、人口10万人当たりの事故件数は日本の651.6件に比べてフィリピンは7.2件であり、そ



バターン州で乗ったトウクトゥク



マニラ市中心部の風景

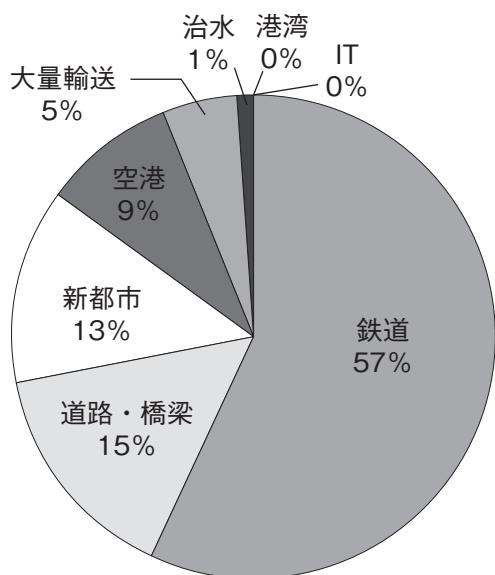


自由研究

の差は圧倒的だ。そして、平日は休日に比べて、渋滞が起きやすいように感じた。このことと、大雨によって学校や会社が休みとなった日には渋滞が発生しなかったこと、一日の中で朝夕の渋滞が最も激しかったことを考慮すると、自家用車を用いて通勤または通学する人々によって渋滞が引き起こされるのだと考えた。私は、自家用車ではなくバスや電車などの公共交通機関を利用し、通勤・通学する人が増えれば渋滞を解消若しくは緩和できるのではないか、と思い至った。

フィリピンの公共交通機関には、どのようなものがあるのだろうか。通訳のリンさんによると、日本でお馴染みのバス、電車、タクシーの他に日本には見られない「トゥクトゥク」、「ジプニー」などがあるそうだ。トゥクトゥクとは、主に客席となるサイドカー付きバイクのようなものだ。短距離用に特化したタクシーのように利用されている。フィリピン特有のものと言われる、ジプニーはバスとタクシーの合いの子のようなものらしい。バスのように走行ルートが定められているが、ルート上の好きな場所で昇降車できるタクシーのような便利さを併せ持ち、フィリピンでは庶民の足としてもっともポピュラーだ。この中でも私は、日本で、通勤手段として自家用車に次いで2番目に多く用いられている電車に着目した。フィリピンの電車が今よりももっと利用されるためには、何が問題でどう変わればよいのか。最大の問題は、路線の少なさだろう。フィリピン国内で電車が利用できるのはマニラ市のみで、運行されているのは計3種類の路線だけだ。改善策としては、マニラ市内の路線を更に充実させること、マニラ市と他の市を繋ぐ路線を整備すること、などが挙げられる。更に詳しく調べていくと、今まさに、フィリピンの鉄道が変わろうとしていることが分かった。2016年に発足したドゥテルテ政権は、「ビ

図 現時点におけるインフラ整備プロジェクトのセクター別内訳（予算金額ベース）



（出展）<http://www.build.gov.ph/>より作成



ルド・ビルド・ビルド」と呼ばれる大規模なインフラ整備計画を現在実行に移している。この計画では、2017年9月27日時点で69種のインフラ整備プロジェクトが予定されていたが、その内、鉄道に関するプロジェクトが大部分を占める（図）。計画の具体的な内容としては、マニラ首都圏初となる地下鉄整備計画や、ケソン市のミナダナオ・アベニューからパラニャーケ市のニノイ・アキノ国際航空を繋ぐ路線の建設などである。

特筆すべきは、「ビルド・ビルド・ビルド」のために、日本も2017年1月に1兆円規模の官民支援を約束したことだ。日本国ひいては私たち日本人はフィリピンの交通問題、インフラ整備と無関

自由研究

係とは言えないのだ。

日比両国が、更に親交を深め、共に発展していくためにも、現在推し進められているフィリピンの

交通インフラ整備計画に今後も注目していきたい。

(図：https://www.dir.co.jp/report/asian_insight/20171005_012347.html)



～貧困問題～

福島県立いわき総合高等学校 1年 小 泉 胡 春

私はフィリピンに滞在していた一週間の中で何度も考えさせられたことがある。それは貧困問題だ。貧困と聞いて思いつく事はお金や住む場所、食料が十分にない等マイナスなことがほとんどだ。フィリピンの現状はそのすべてに当てはまった。

私たち日本人には少し考えにくいことかもしれないが、良いところも悪いところも含めてフィリピンの現状を少しでも多くの人に知ってもらいたいと思い、この問題を研究テーマにした。

私が一番紹介したいのはフィリピンのパヤタス地区に住む人々の暮らしだ。パヤタス地区に住む人々の収入はP 100~150 (200円~300円) ほどだ。日本では到底あり得ないことだ。

パヤタス地区の人々はこのわずかな収入で生活しなければいけない。家庭をもっていれば家族を養わなければいけない。家庭訪問させていただいたお家のお話はとても厳しいものだった。収入が少ないため、食べ物が買えないときは一日一食。またはゴミ山の中のまだ食べることができるものを探し食べているそうだ。

水の確保も大変なものだった。水道をひくことができない家庭は近所から買ったり、井戸の水を利用しているそうだ。

お金の問題もあるが栄養失調が原因で知能の発達に遅れがみられる子供も少なくないという。つまり学校へ行くことが難しいということだ。学校

へ行くことができたとしても、差別やいじめが原因で退学してしまう子供が多いそうだ。

パヤタス地区に限らずフィリピンでは、いくら頭がよくなつて、いい大学を卒業をしたって、コネのない人々が自分の夢を叶える可能性はほとんどゼロに近いため、希望する仕事にありつけるはずもなく、首都マニラでは青年男女の失業率は絶えず50%を超えるといわれているらしい。

しかし、そんな現実を知りながらも私が訪問した家庭のお母さんは「自分の子供には常に夢を与えて続けていたい。夢を諦めることがないようにいつも味方でいたい。」と、言っていた。国の現実を知りながらも、こう思えることは本当に素晴らしいと思った。

フィリピンに滞在し、現地の方と交流をする時いつも思っていた。

なぜどんなに厳しいことでも現地の方は私たちに“笑顔”で話してくれるのか。

その答えはこの研究をした後も分からなかつた。

しかしそんなことすらも笑顔で話すことができるほど現実とちゃんと向き合っているのかもしれないと思った。どこまで行っても貧困問題から逃げることはできない。しかしそんな現実の中から夢や希望を見出して、今日もひたすらに生きているように見えた。

自由研究

小さな体で毎日働いている子も、お花を売っている子も、学校に通えず家で勉強している子も、きっとそれだけがすべてじゃなく、厳しい毎の中に自分自身で夢や希望を見つけているから自然と笑顔ができるものなんだと思った。

強さ。

それがフィリピンで一番輝いていたものだと思う。この研究をした事で私もそんな輝きを身につけることができるようになりたいと強く思った。



フィリピン派遣事後アンケート

1. 事前研修について

- ・決められていた2回の研修の他にも集まってパフォーマンスの練習や打ち合わせをして、仲を深めることができて良かった。
- ・すぐに打ち解けることが出来て、良かった。メンバーの役割をしっかり決められた。
- ・海外は初めてではなかったが、不安と緊張が混ざって複雑な心境でした。
- ・2回だけでは練習が足りなかったが、自主的に集まって練習できたのは良かった。

2. フィリピン本社訪問

- ・フィリピンの赤十字について詳しく知ることが出来て良かった。英語を聞き取るのは大変だった。
- ・献血活動や支援活動など日本と同じ活動があり、同じ赤十字としてしっかり繋がっていると感じた。
- ・皆さんのが優しく接してくれたのが印象的でした。

3. ソルトパヤタス訪問

- ・発展途上国の格差、貧困問題を目の当たりにして心が痛んだ。これから自分に何ができるか考えてていきたい。
- ・貧困地域を実際に見るという貴重な体験ができ、視野を広めることができた。
- ・いろいろな環境を知ることが出来て良い経験が出来た。

4. 支部訪問

- ・どの支部でも温かく迎えてくれてとても嬉しかった。

- ・ユースメンバーが親身になってエスコートしてくれて嬉しかった。自分から積極的にコミュニケーションがとれた。
- ・日本と異なる構造なので興味が湧きました。

5. 戦争資料館

- ・地域の学生さんが説明してくれたことに驚いた。もっと日本とフィリピンの歴史を勉強していくべきだった。
- ・日本の黒い部分を見た気がした。ユースメンバーが展示物を丁寧に説明してくれた。
- ・昔のことを改めて知ることが出来た。自分たちがどのようにして次の世代に話すかを考えることが出来た。
- ・ユースメンバーが詳しく説明してくれてとても分かりやすかった。

6. 学校訪問

- ・フィリピンの学生さんは驚くほど明るく、フレンドリーで少し戸惑ってしまった。どの学校も素晴らしいパフォーマンスで歓迎してくれて嬉しかった。
- ・どこを訪ねても熱烈に歓迎してくれて、まるでスターになったかのような気分を味わえた。
- ・素晴らしいダンスや歌を披露してくれた。

7. ゼロポイント

- ・戦争で日本がしたことは決して許されることではないと思う。今、友好な関係を築けているとの意味をしっかりとと考えたい。
- ・日本との和解を願うフィリピン人の心の広さ、温かさを感じさせられた。

8. バタアン原発

- ・停電により見学出来なかつたのは残念。
- ・トラブルがあつて中を見ることが出来なかつたのが残念だつた。
- ・自分の目で確かめることができて良かった。
- ・日本語版の説明資料がなかつた。停電で内部が見られなかつた。

- ・ベッドが寝やすかつた。

9. リサイクル施設

- ・すべてのものを無駄にしないという考えは素晴らしいと思ったが、作業する場所をもっときれいに整備したほうが良いと思った。
- ・実際に作業を体験させてもらい、貴重な体験が出来た。プラスチックで椅子を作っていてすごかつた。
- ・ペットボトルで作る船など、フィリピンの人たちが考えるリサイクルは素晴らしいと思った。

13. ガイド

- ・わかりやすく、時には面白く和ませてくれてありがとうございました。もっと自分から話しかけていろいろ教えてもらえばよかったです。
- ・質問に丁寧に教えてくれたり、タガログ語を教えてくれたりと大変お世話になつた。
- ・お母さん的存在でお世話になつた。

14. 全体の感想

- ・今回の派遣に参加させていただいたことで、将来自分がやりたいことが明確になりました。この経験を必ずこれから的人生に生かしていきます。本当に貴重な体験をありがとうございました。
- ・今回の派遣で得たものを一人でも多くの人に伝えたり、今後の活動や日々の生活に生かしていきたい。毎日が充実していてとても楽しかった。もう一度行ってみたい。
- ・今回初めての海外旅行で不安でしたが、現地の観光施設を見たり、料理を食べたり、英語がベースの生活はとても楽しかったです。日本とは全く違う現状を目の当たりにし、ショックを受けた部分は多々ありましたが、自分の目でしっかりと”フィリピン”を見ることが出来て良かったです。
- ・今回の企画に参加で來たことは自分を強める一つの方法になったと思う。何事にも挑戦することが大事だと改めて気づかされた。
- ・行きの飛行機の到着が遅く、ホテルに入ったのは夜中の12時頃になってしまった。次の日は本社訪問だったので、寝不足気味だった。もう少し早い時間の飛行機だと良かったと思う。

10. ユースメンバーとの交流

- ・ユースメンバーもとても明るく、優しかった。たくさんの交流を通してフィリピン人の温かい人間性を感じることが出来て良かった。
- ・みんな明るい人たちで、楽しかった。英語を勉強していく必要があると感じた。
- ・皆さんフレンドリーで楽しかった。

11. 食事

- ・最初は戸惑つたが慣れたら美味しかつた。フィリピンの食を体験出来て嬉しかつた。
- ・思ったより口に合つた。日本の米に慣れているせいか、現地の米が苦手だつた。
- ・日本食もあったので感動した。

12. ホテル

- ・冷房が強すぎたがそれ以外は快適だつた。
- ・日本のホテルと変わりなく快適に過ごせた。Wi-Fiがあつて、助かつた。

●事前・事後研修会の開催

○第1回事前研修

日 時：平成30年6月24日(日)

10時30分～15時30分

場 所：日本赤十字社福島県支部 3階 大会議室

内 容

1. 日本赤十字社福島県支部長挨拶

2. 派遣メンバー自己紹介

3. 平成30年度派遣事業について

(1) 派遣事業の目的・概要

(2) 派遣日程案

(3) 交流内容について

(4) 平成28年度派遣事業概要報告

学法福島高校 根本 裕之先生

4. 今後の日程、自己学習、準備についての質

疑応答

(1) 役割分担

(2) 自己学習について

5. 赤十字の活動について

6. その他(全体写真、名札用顔写真撮影)昼食時

○第2回事前研修

日 時：平成30年7月22日(日)

10時30分～15時30分

場 所：日本赤十字社福島県支部 3階 大会議室

内 容

1. 確認事項

(1) 派遣日程・役割分担・各自準備物

(2) 交流内容

2. 事前学習、自己研修内容の確認

(1) 研究テーマについて

(2) 実施報告書担当について

3. 交流準備

(1) よさこい練習

(2) 福島県JRC紹介DVDの作成割り当て

○事後研修

日 時：平成30年9月16日(日)

10時30分～15時30分

場 所：日赤福島県支部

内 容

1. 日程確認、事務連絡

(1) 挨拶・日程確認

(2) 経費の確認、領収書の提出

2. 研修報告書作成、内容の校正（日報、公式訪問記録）

3. 県大会での発表準備

(1) 資料、発表原稿の構成の確認

(2) 作成作業の担当、スケジュール確認

4. フィリピン派遣の感想

研修内容を今後の活動にどのようにいかしていくか。



●報告会の開催

○県北地区高校JRC秋季総会

日 時：10月19日（金）

場 所：日本赤十字社福島県支部

参加者：63名

報告者：佐藤 涼香（福島成蹊高校）、

原 大河（学法福島高校）

○県南地区高校JRC秋季総会

日 時：10月23日（火）

場 所：福島県立郡山高等学校

参加者：71名

報告者：齋藤 優真（郡山北工業高校）、

内儀 雪野（白河旭高校）



○いわき・相双地区高校JRC秋季総会

日 時：11月6日（火）

場 所：いわき市生涯学習センター

参加者：61名

報告者：小泉 胡春（いわき総合高校）



○県高校秋季総会

日 時：11月17日（土）～18日（日）

場 所：いわき新舞子ハイツ

参加者：114名

報告者：齋藤 優真（郡山北工業高校）、

原 大河（学法福島高校）、

小泉 胡春（いわき総合高校）、

佐藤 涼香（福島成蹊高校）



平成30年度 日本赤十字社福島県支部主催 青少年赤十字国際交流事業 “フィリピン派遣” 実施要項

1. 目的

青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的事業として、県内の青少年赤十字メンバーを海外の赤十字加盟国へ派遣し、同国の青少年赤十字メンバーとの交流研修を通じ、国際性豊かな青少年を育成するとともに、本県青少年赤十字活動のより一層の推進を図るために実施する。

特に、福島県は東日本大震災により地震・津波災害に加えて世界に類のない原子力発電所事故による甚大な被害を受けた。大震災から7年が経過し、ようやく復興へ向けた力強い動きも見られるようになってきたが、一方で未だに5万人近い県民が県内外での避難生活を余儀なくされている。

この福島の現状を派遣メンバー自らが海外に伝えるとともに数多くの支援を受けたことへの感謝も伝えながら現地の青少年との交流を図る。

2. 主催

日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会

3. 後援（予定）

福島県教育委員会、福島県高等学校校長協会

4. 実施機関

平成30年8月12日(日)～18日(土)6泊7日 成田⇒マニラ(滞在研修)

5. 派遣国、地域

フィリピン共和国 マニラ首都圏、近隣州

なお、実施機関と派遣先の詳細については、日赤福島県支部とフィリピン赤十字社との間の十分な調整のもとに決定し実施する。

6. 派遣人員（予算ベース）

高校生青少年赤十字メンバー並びに被災地高校（青少年赤十字未加盟）の高校生8名（各地区から2名程度）

高等学校青少年赤十字指導者（教師）並びに被災地高校教師2名

日本赤十字社福島県支部または管下施設職員 2名 合計12名

7. 参加要件

（原則として下記の条件を満たしていること）

(1) 青少年赤十字メンバー

① 地区主催の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターを終了し、ボランティアサービス、先見等の基本的理解ができていること。

日頃の青少年赤十字活動に積極的に参加していること（学年は2年生が望ましい）

② 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

③ リーダーとしての資質を備え、将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

④ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(2) 被災校高校生

① 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加

できること。

② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。
③ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(3) 青少年赤十字指導者（教師）

① 青少年赤十字指導者としてリーダーシップ・トレーニング・センターか県指導者講習会等の受講などを含む十分な指導歴を持ち、青少年赤十字ほか赤十字事業の基本的理解ができていること。

② 心身とも健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

③ 将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

(4) 記録写真・ビデオの利用

事前・事後研修、現地派遣中の派遣メンバーの活動状況を写真ビデオに撮影したものについて、赤十字の事業紹介等広報活動で使用することに承諾いただけること。

8. 応募書類、応募期日

高校生及び指導者（教師）の派遣希望する青少年赤十字加盟校並びに被災校の高校生および教師は、応募書類（別紙1、別紙2）を平成30年5月11日(金)までに日赤福島県支部へ到着する様に送付するものとする。

なお応募受け付けは、一つの高校につき高校生1名とするので、学校内で調整願いたいこと。

9. 派遣メンバーの選考

(1) 選考

日赤福島県支部は、提出書類を審査し、特に青少年赤十字加盟高校については過去の派遣実績、地域バランス等を考慮して派遣メンバーを決定する。

日赤福島県支部は、結果を速やかに応募のあった高校へ通知する。

(2) 参加承諾書

派遣メンバーとして決定された者は、速やかに参加承諾書（別紙3、4）を日赤福島県支部へ提出する。

(3) 派遣の取り消し

派遣メンバーとして決定された者について、後日不適当と認められた場合には、派遣を取り消すことがある。

10. 研修内容

- (1) フィリピン赤十字社訪問・関連施設見学
- (2) 青少年赤十字加盟学校訪問・青少年赤十字メンバー、地域住民との交流
- (3) 伝統文化・史跡視察・フィリピンの災害対応研修
- (4) その他 フィリピン家庭訪問、青年ボランティアとの交流、関係団体訪問を予定

11. 経費

(1) 参加者本人負担

パスポート取得経費、予防接種代（1万円を超えた場合に超えた分）

(2) 日本赤十字社福島県支部負担

国内交通費、渡航代、海外旅行保険代、宿泊・食費代、予防接種代（上限1万円）ほか（1）以外の経費

12. 事前・事後研修

派遣に先立ち、派遣国の状況、交流内容等についての事前研修会を実施する。

帰国後は、報告書作成、各地区

での報告会実施のための事後研修会を実施する。日程の詳細は、派遣決定者に追って通知する。事前・事後研修の参加に要する旅費は日赤福島県支部が負担する。

(1) 第1回事前研修会

- ① 期日
平成30年6月16日(土)または17日(日)…第1案
平成30年6月23日(土)または24日(日)…第2案
- ② 場所
日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容
派遣事業の概要、赤十字と青少年赤十字について代表・団員としての心構えについて、フィリピン青少年赤十字との交流内容について、他

(2) 第2回事前研修会

- ① 期日
平成30年7月14日(土)または15日(日)または16日(月)…第1案
平成30年7月21日(土)または22日(日)…第2案
- ② 場所
日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容
派遣日程について、事前研修のまとめ、研修旅行に関する諸注意、他

(3) 事後研修

- ① 期日
平成30年9月15日(土)または16日(日)または17日(月)…第1案
平成30年9月22日(土)または23日(日)…第2案
- ② 場所
日本赤十字社福島県支部
- ③ 内容
派遣概要の報告、報告書の作成について、資料整理、その他
- (4) 支部長（知事）表敬訪問
出発前または帰国後、福島県庁との調整により実施する。

13. その他

帰国後は研修の成果を自校のほか、青少年赤十字の地区総会、県秋季総会などで報告いただくことになります。そのための青少年赤十字加盟校の生徒のほか、未加盟高生徒についても可能な限り総会に出席いただきますようご配慮願います。

なお、現地の治安事情等のやむを得ない事由により派遣を延期または中止することがあります。

持 参 の 交 流 物 品

公式訪問先への記念品

- 赤べこ
- トピックアルバム
- 福島県、福島市、英文パンフレット



交流時使用物品

- JRC旗一式
- 書道用具一式
- よさこい用法被（血液センターより貸与）
- よさこい鳴子
- 日本国歌CD
- ラジカセ

一円玉募金

100,000円（日本円）

フィリピンRCYメンバーへの記念品

- JRCバッヂ
- JRCワッペン

あとがき

フィリピン派遣は今年度第9回目を迎えました。昨年はフィリピンからユースメンバーを福島に招いての交流だったので、2年ぶりの訪問となります。8月はフィリピンでは雨期に当たり、台風被害が多いのですが、今年も台風の影響で一部の支部での交流が出来ませんでした。しかし、それらの災害に対応するフィリピン赤十字やボランティアの活動を目の当たりにし、この国際交流の目的の一つである互いの活動への理解をより一層深めることができたのではないかと思います。帰路では、飛行場のトラブルで飛行機が大幅に遅れ、急遽成田泊というアクシデントもありましたが、全員元気に帰福しその成果を各地区、県大会等で報告してくれました。

県内から6名の高校生の派遣です。参加メンバーには自分たちが経験したこと、感じたこと、当たり前のこと、貧困について、戦争について、私たち一人一人の責任について、一人でも多くの仲間に伝え、一緒に考え、行動につなげていってほしいと思います。

事後のアンケートで、若いユースメンバーが戦争についてきちんと理解し日本の行った行為についてもしっかりと説明してくれたことに対して、驚きと自戒の念を感じたことが書いてありました。さらに、それらの過去を踏まえたうえでお親日的であることに感動している様子が伝わってきます。実際に触れあうことでの感じられることをこの派遣事業では大切にしていきたいと思います。

来年は相互交流の意味でフィリピンからのメンバーを迎えることになります。自分たちは何を伝えたいのか。今回の経験が来年に繋がることを期待しています。

ご協力頂きました学校関係者、保護者の皆様、フィリピン赤十字、各支部、ユースメンバーの方々初め皆様に感謝いたします。

日本赤十字社風島県支部青少年赤十字担当 佐藤敦子

